東方妖快園

八雲糖類おぅ@若干鬱気味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方妖快園

【Ｎコード】
Ｎ１００５Ｘ

【作者名】
八雲糖類おぅ@若干鬱気味

【あらすじ】
狂人、狂歌幽月は裁判にかけられた時に大衆の目の前で自殺した。がしかし神の「好奇心」のせいで幻想郷へ転生することとなった・・・
時系列は結構最近！？
死亡フラグビンビン♂な世界を主人公が面白おかしく暮らす。そんなお話です
※十二話でようやく狂う感じです。それまでは自由人かつ駄目妖怪（人間）です

作者が出来る限りテンプレ破壊をいたしますが文才がカス並ですのであまり期待をするとたいへん残念な気持ちになるでしょう・・・・

第零初　プロローグってほかの言い方有ったっけ？（前書き）

嗚呼、やっちまったよどうしようず
まあ自分が楽しいんだからいいかなｗｗ

第零初　プロローグってほかの言い方有ったっけ？

狂人

人は俺をそういうだろう。

物心つく前に母親が死んだ。高校入って間もない頃に親父が死んだ。親父は大きな企業の代表取締役・・・簡単に言えば社長だったので金には困らなかった。
会社は適当に親父の右腕って呼ばれていた奴にやった。つまり俺はニートである。
けれどもただのニートじゃない。別にニートとしてでなく、人として。
そう、俺は俗に言う犯罪者ってやつだ。

犯罪にも色々種類はあるだろう。たとえば「殺人」「窃盗」「強盗」「強姦」「薬物」・・・・・・・・・とキリが無いぐらい挙げられるだろう。
俺はそんなかで多分、一番最悪って言われるであろう「殺人」をした。
最初は好奇心でやった。そのときに感じた快楽を忘れられずに2人、3人、4人・・・
今ではもう数えられないくらいやった。
人殺しではなく、殺人鬼になっていった。

でもそんだけ殺したんだから警察も黙っちゃいなかった。
結論をいうと捕まった。
それはもう大人数に取り押さえられて。
俺は別に抵抗しなかった。しても良かったんだが、なんかこれで捕

まったら面白いんじゃないかって思ってしまった。
どうせ死刑とかになって人生終了なだけだって分かってたはずなのに捕まった。

裁判にかけられたとき、俺が殺した名も知らない奴らの遺族が俺になんか叫んでたが全部無視した。
検察やらに死体が皆まるで獣に食われた様だがなぜかって聞かれた。
俺は正直に話した。
するとその場にいた者皆凍りついた。
なぜか？それは俺が食ったからだ。
理由付けるなら殺した時と同じく好奇心に駆られて。
ついでに殺した時の相手のことを覚えてる限り話した。
遺族どもはみな絶望しきった顔をした。
俺はもっとそんな顔を見たくなった。
なので手錠かけられてる手を首に持っていき、思いっきり引っかいた。
腐っても俺は何人も殺してきた殺人鬼。
一発で視界が揺らいだ。意識が完全に失う前にそこらにいた者の顔を見た。
皆不の感情をだした。悲鳴をあげたのもいた。
俺はそれらが見れて満足だった。

そして俺は死んだ。

第零初　プロローグってほかの言い方有ったっけ？（後書き）

一話と設定を今日中にうpしますぜー

第一始　すべてはここからはじまｔ（ｒｙ（前書き）

一話目・・・・だけど東方の世界にすら行ってないこれいかに

第一始　すべてはここからはじまｔ（ｒｙ

「知らないてんじょ・・・空間だ」

ありきたりなセリフを言おうとしたがそこに天井はなく見渡す限り
真っ白な空間で
上下左右あるの無いのかも判断できなかった。

「おお、気が付いたか」

いきなり俺以外誰もいないはずの空間からそんな声がした。
気づくと目の前に２０代ぐらいの男がいた。
・・・・よし、青年Ａとなづけよう。

「・・・・誰だてめぇ」

「ふふふ、聞いて驚くなよ」

「早く言え」

すると青年Ａは大きく息をすい

「遠くば声を耳に聞け！
近くば寄って目にもみよ！
やあやあ我こｓ「早く言え」・・・・わあった、わあったよ
だからさその俺の首を絞めようとしないでくれ」

「チッ」

仕方なく首締めを止めてやると

「俺は神だ！ＧＯＤだぜ！」

なんということだ青年Ａは神Ａだったのだ。

「いや神Ａって扱い酷くね？」

心を読むな

・・・でだ、こいつが仮に本当に神だとしたらなぜ俺なんかを相手にしてんだ？

普通は地獄行きとかじゃないんだろうか？

いやこの場合、なんかを理由に転生させる的なことを言ってくるのかもしれない。

「なぜ分かったし」

ビンゴだったみたいだ。

「で？なんで俺を転生させるんだ？

作者はテンプレにすんのははいやだって言ってたはずだが」

「おいおいメタるなよ・・・

なぜ転生させるかはまあ簡単に言えば好奇心でだ」

神Ａはまた変のことを口走ってきた。

「好奇心だ？」

「ああそうだ。お前も『好奇心』で罪を犯したんだろう？

だったら罰するよりその罪に関わることで罰したほうがいいんじゃね？
ってさっき思いついたから即採用したのさ」
こいつは本当に神なんだろうか？
ただの？にしか見えないのだがなぜだろう？
「意図が分かったことで更に質問だが俺はどんな世界に行くんだ？
できれば退屈しないとこがいいんだが」
「ワオ、更生する気ゼロですね分かります
まあ世界観としてはお前のいた世界の平行世界だ。
もっと言えばその世界の隔離された所で人はもちろんのこと妖怪や
俺よりは位は下だが神だっているお前の常識を全否定するようなと
こだ」
「・・・・幻想郷だろそれ、東方の」
まさかそんな死亡フラグ満開な所に行く羽目になるなんてな・・・
退屈無縁だな
「なんだ東方しってんなか？
じゃあルールと能力・種族を説明するぞ」
・・・・・ん？こいつ今なんて言った？
「おい、種族って人間じゃないのか」
「ＮＯＮ！お前は妖怪なってもらうぜ」

「妖怪か・・・・ってことは寿命も長くなるしもっと強くなれるってことか」

「戦闘狂（バトルジャンキー）かよお前。
次にルールだが基本的に原作に介入してもらってもかまわない。だが原作ででてくるキャラは殺すなよ？」

「りょーかいだ」

といっても自分の退屈を無くしてくれる様な人物達まで殺そうとは思わない。

「最後に能力だな
これは作者が相当考えてたぞ
チートすぎのばっか思いついて大変だったらしい」

「メタんなっていった奴がメタんなよ」

「それは置いといて、
お前の能力はだな『能力を創る程度の能力』だ」

「チートすぎんだろ
相当考えた結果がそれかよ」

しょうがないじゃないかー！これでも頑張った方なんだぞー！

「作者出てくんな
んでその能力はどんな能力なんだ？」

「聞かなくても分かるだろ」

「だな」

なんともシンプルで分かりやすい説明なんだ。
久しぶりに感動したぜ。

「さてと、説明も済んだことだし
Ｌｅｔ' ｓ　転生だ！」

神Ａがそういった瞬間、俺の足元だけ黒くなり俺はそこに落ちていった。

第一始　すべてはここからはじまｔ（ｒｙ（後書き）

設定も投稿しますおー

号外　キャラ設定（前書き）

今日はこれで最後ですぜ旦那

号外　キャラ設定

名前：狂歌（きょうか）　幽月（ゆうげつ）
性別：バベルの塔が下半身に聳え立つ
年齢：２２歳あたり（本人はあまり覚えていない）
身長：１７２ｃｍ
体重：５４ｋｇ
種族：妖怪
武器：素手・刀・仕込み刀（番傘に一本）
能力：能力を創る程度の能力

容姿：髪は渋い紫、目は緑、端麗な顔立ち
服装：派手な着物を好んで着る、だいたいは銀魂の高杉みたいな着物、黒い番傘を持ち、刀を掛ける

性格：基本的に楽天家で快楽主義、少し周りからずれている
好きなもの：面白いもの、楽しいこと、酒、煙管、非常識
嫌いなもの：退屈、暇、常識

備考：プロローグとそれ以降での変わりようは最早仕様となっている、髪は元は赤だが染めた。
高杉晋助に似ているのは本人が似せたから
能力の説明：分かるだろ？　（ｂｙ神

モブ
名前：屋久間（やくま）　祷霊（とうれい）
性別：バベルの塔がｓ（ｒｙ
年齢：測量不能
身長：１８０ｃｍ

体重：５８ｋｇ
種族：神
武器：戦う気無し
能力：世界をつくり管理する程度の能力

容姿：茶髪黒目、少し細い目
服装：暗い赤のさむえ、なんとなく木刀を持ってるが使う気は毛ほどにない

性格：マイペース、ぐうたら、怠けや
好きなもの：甘いもの、ゲーム、ＰＣ
嫌いなもの：真面目に働くこと、努力

備考：名前から分かるように？作者の化身。もとい小説の説明役で性格などは作者っぽくしてある
つまり駄神である

名前：落雲（おちぐも）　空（うつ）
性別：男→女
年齢：１８歳
身長：？→１５５ｃｍ
体重：４２ｋｇ
種族：妖怪
武器：上目遣い（無意識）
能力：恩は返し、恩を返される程度の能力

容姿：茶髪紅目、丸っこい目
服装：学ラン

性格：律儀・常識人・苦労人
好きなもの：平和、ビーフジャーキー、日本茶
嫌いなもの：自己中、酒

備考：屋久間に無理やり転生させられた上、性転換までさせられた哀れな娘。
基本的に幽月、カナに突っ込む。

能力の説明：簡単に解釈すると自分がした行いは自分に降りかかり、自分にした行いはした者に降りかかる。しかし何が何でもそうはならなく（恩）限定となっている。

号外　キャラ設定（後書き）

・・・のりで書き始めちゃったけどたたかれたらどうしよう
まあ自己中的にいっちゃうと自分が楽しむってのが第一目的です

第二笑　幽月、幻想郷に立つ（前書き）

二日連続投稿ですね
今日はこれだけです（いつまでこんなに続くのだろうか）
そういえばがっこーの帰り道に１００円拾いました。
即ジュース代になり、自分の喉を潤してくれました。
こんな駄目な奴が書いたものですがよろしくです
それでは第二笑　ガ●ダム大地に立つです

第二笑　幽月、幻想郷に立つ

「知らないてんじょ・・・草原だ」

デジャヴュを感じられるセリフを放ったがそれはさておき
気が付いたらそこは辺り一面の緑の海だった。都会じゃお目にかかれない光景だ。
太陽はちょうど天辺にあり、そこらじゅうで蝉が鳴いている。

「うっし、ちゃんと着いたようだな」

声がしたほうを向くとそこには俺を転生させたあの神Ａがいた。

「神Ａって・・・俺にはちゃんと名前あるから、神Ａじゃなくて屋久間　祷霊って言う立派な名前があるから」

そんなの初耳だ。というかなぜ神Ａがここにいるんだ？普通はテレパシーやら手紙やらで登場するんじゃないのか？

「いや神Ａじゃねーよ。お前の耳は素敵なドアノブですか？あとメタるなよ」

「ごちゃごちゃ五月蝿い早く言え」

「お前俺に会って間もないのに３回も早く言えって言ったぞ。何故ここにいるかか・・・・それはだな平たく言えばテンプレ破壊のためさ」

・・・こいつはなぜ自分の言っていることとやっていることが矛盾

しているんだ。

「そしてここは幻想郷のどっかだぜ！」

どっかって把握してないのかよ・・・

「・・・ん？幻想郷だと？」

「イェース」

「幻想郷も出来てなくて東方キャラもまだ生まれてない太古の昔とかじゃな無いのか？」

「ＤＡ・ＫＡ・ＲＡ、テンプレ破壊なのさ。といっても霊夢とか魔理沙とかはまだ生まれてないけどよ。具体的に言えば１９６３年の夏だな」

「１９６３年というとケネディ暗殺の年か」

「お！意外と頭いいな。見直したぞ」

なんかこいつに言われるとイラッと来る。

「でも原作から三十年以上もあるぞ、この時間どうすりゃいいんだ？」

「妖力や能力の練習でもすればいいんじゃね？」

なんとも適当な答えであるが確かにそれが一番いいのかもしれない。

「後、お前の能力あるだろ？」

「能力を創る程度の能力だっけか？」

「ああそれなんだがな今のお前じゃその能力の半分も使いこなせないぞ」

なんでだろうか、能力を使うのになんか特殊な力とか使わないといけないのか？
それともこの目の前にいる神が嫌がらせ的な意味でやってるのかろうか？

「理解できてないみたいだな、まあ仕方ないか・・・
簡単に言うと強力な能力を持つとその者が能力に飲まれることがあるんだ。フランドールとかがいい例だろう、狂気に染まり見境無く破壊し続ける。そんなことを繰り返していけばいずれ体はもたなくなり死んじまうだろう、そのためだ」

「お前もたまには役立つことを言うんだな」

「・・・そしてもうひとつ理由があってな、普通の妖怪の場合３０年ぐらい生きて妖力が増えたとしても良くて中級妖怪ぐらいだろう。そんなんじゃ絶対に原作キャラと戦っても勝てないだろうし、下手したら死ぬうえに見ている俺もつまらない、だからたった今この地に生まれたお前に大妖怪の比にならない位の妖力を入れてみたから下手したら粉砕☆玉砕☆大喝采しちまうんだ。
それを制御出来るくらいになったら能力もだんだんと使えるようになると思うぞ」

おｋ、把握・・・って俺は何を言ってるんだ

「それは分かったがなんだこの格好は？」

文字じゃこの格好って言っても伝わらないので説明すると誰がどう見ても高杉晋助って言える位の服装をしている。高杉をしってる輩がみたら完璧にコスプレって思うぐらい完成度高い着物である。近くには黒い番傘と鍔のない太刀が二つ、短刀・脇差がひとつづつ落ちていた。

「高杉のコスプレ・・・と言いたい所だが似て非なるものだぞ。一見コスプレに見えるそれは破れたりしても勝手に直ってくれる優れものだ！

そしてそこらに落ちてる物はお前にやるぜ。皆、大業物の刀たちだが一本だけ最上大業物って呼ばれるやつも混じってるぜ」

最上大業物って言うと長船秀光や初代兼元とかの恐ろしく切れるってやつか。

「それで、どれがその大目玉なんだ？」

「その番傘だ」

・・・こいつは頭がすこし、いやかなりおかしい様だ。可哀想に。

「・・・いやこいつただの傘じゃないからね？

ほらこれ、仕込み刀だからね？

毒吐かないでね？結構心にきてるからね？」

屋久間が傘の持ち手を体を弓形にしながら引くと美しく鈍い光を放つ刀が出てきた。

確かに良く切れそうだ。

「なんでこんなまどろっこしいことするんだよ」

「なんとなく」

酷いものだ。だが案外気に入ったので有難く貰っておこうと思う。

「んじゃ、俺は帰りますかね」

よいてこしょと屋久間は立ち上がると「なんかあったらよんでちょ」

といい消えていった。

さてこれからどうしようか

第二笑　幽月、幻想郷に立つ（後書き）

なんというか変な終わり方ですねｗｗｗ
感想は大歓迎です！感想だけでなく「ここはこうした方がいい」だとか「ここが変ｏｒ間違ってる」のようなものでも大大大歓迎です！

第三願　やっぱ自分の家は落ち着く（前書き）

今回は幽月さんがＭＹ　ＨＯＵＳＥを作る（作らせる）お話です。
次話からようやく東方キャラ登場です。
４話目からやっと原作キャラって遅すぎる・・・・
それでは駄文ですがお楽しみください

第三願　やっぱ自分の家は落ち着く

とりあえず屋久間が消えてから俺は妖力の練習をした。
練習といっても妖力を抑えることと妖力を開放するといった作業を延々と続けていった。
ぶっちゃけ本音を言ってしまえば妖力の使い方が全くといっても良いほど分からないため途方に暮れていたところ、人間だったころと比べ感じた事のない力が湧いたので勘で操ってみたらそいつが妖力だった。という一連を練習と呼んでいるだけだった。

たったいま気付いたんだがとっくのとうに日は傾き空一面鮮血みたいに真っ赤になっている。
ここで問題が発生した。何かというと暮らしの三大重要要素衣食住の内の住である。衣はすでにあるため問題ない。食はそこらにいる獣でも狩ればいいだろう。しかし住の場合、最低雨がしのげる場所ならいいだろがそんなに長いことその生活するのは俺には無理だ。・・・・・あいつ呼ぶか。

「おーい屋久間、でてこいや」

しかし呼んでみたものの反応が無い。何かあったら呼べとは嘘だったのだろうか。「いや呼ぶのずいぶんと早くない？」

「呼べと言ったのはお前だろう」

「言ったは言ったけどさ、普通だとぜんぜん呼ばずに痺れを切らしたこっちが勝手に行くってのじゃないの？」

だったら呼べとか言うな。

「まあいい、それで何のようだ？」

「家を作ってくれ」

「・・・・は？」

物分りの悪い奴だ。夕暮れ時に行くあての無い俺が家を作ってくれと頼んでるのが分からないのなんて。

「物分りが悪いって何でそうなるんだよ。というか作ってやってもこっちは構わないのだが勝手に家とか建てるとここらを縄張りにしてる妖怪が黙ってないと思うぞ」

確かにそうだな、今の俺では妖力が有っても使い方が分からないので宝の持ち腐れ。

そして相手は此処を縄張りのにしているってことはそれだけの力があるという証拠。きっと太刀打ち出来ずに終わるだろう。

「それじゃあ夢幻館みたいに現実世界の間に作ったらいいんじゃないか？」

「そりゃいい案だな、現実世界と俺のいる世界の間に作るってのはどうだ？」

現実世界とこいつの世界の間か、悪くないな。

「それでいいと思うぞ」

「よし承知したぜ。今すぐ作ってやんよ」

そういうと屋久間はその場で座禅を組み厨二じみたセリフを放った。
するとやつの周りに強烈な光が輝き始め、俺はあっという間にその光に飲み込まれた。

光が止み目を開けるとそこには先程までいた草原ではなく、人工的に作られたのが見受けられる自然の中にいた。近くには川があるのだろう水の音が聞こえる。
上を見るとそこには太陽や月・星といった光を灯すものは無く暗かったが十分に辺りを見渡せるぐらいの明るさはあった。
幻想郷の美しさとはまた違った美しさを感じられた。

「こんなもんかな？世界と世界の間に空間を作って人が暮らせるように調節したぜ。すばらしい手際の良さだろう？」

たしかに今回ばかりはこいつのことをすごいと思った。が、肝心の家が無かった。これじゃあ、変な場所へ盛大にルーラしただけではないか。

「手際が良かったのは認めるが家が無いようだが？」

「一応作ったは作ったんだがな」

「一応とはどういうことだ、作ったことに変わりは無いんじゃないのか。」

「そうなんだが手違いで現実世界の家を引っ張って着ちまったんだ。」

・・・この空間で知らない誰かと暮らせというのか。いきなりつれ

てこられた方だって困るだろう。第一俺が気まずい。

「でも住んでいる人はいなそうだったし俺の神力で修理したあと立てられた当時並みに綺麗にしてあるから」

「ならいいか」

誰も住んでいない家だったら別に持っていってもいいだろう。え？ダメだって？俺に常識を求めないではしい（ドヤ

「ここから結構遠くにあるからルーラすんぞ」

「ルーラって一回行った事ある場所にしかいけないんじゃないのか」

「ここは俺がつくったんだぞ？場所ぐらい手に取るようにわかるさ」

そういうと屋久間は俺をつかみなんかをつぶやくとそのまま上空へ上がり家があるであろう場所に向け一直線に飛んだ。空を飛んでいると前方に家らしきものが幽かに見えた。それからそれは近づくにつれどんどんと大きくなっていき到着した頃には巨大な洋館と化していた。

「・・・おい」

「どうした？あまりの大きさに言葉も出ないのか？」

「俺一人で住むには大きすぎじゃないか？」

「大は小をかねるって言うだろう。中を見てきたらどうだ？蛇口捻りゃ水かお湯出るようにしてやったから」

結構気の利くことするな、しかしどこに何の部屋があるか覚えるのが大変そうだな。

「まあ住んでるうちに慣れてくだろう。そーいうことで俺はこれからドラクエする予定だから帰るな」

「突っ込みたいところがあったがまあいい。今回のことは感謝するぜ、またなんかあったら頼む」

屋久間は「おうきに」と答えると消えてった。消えるとか便利そうだな。

「さて、今日は風呂入って寝ちまいますか」

自宅を探検するという奇妙な体験をしたが無事に風呂を見つけじっくり入ったが洋館なのになぜか銭湯のような感じの風呂だった。

そんなことがあったりして今は寝室探しをしているのだが妙に視線を感じる。というかあとを付けられている気がする。もの音がして後ろを振り向くと誰もいなく静かで薄暗い廊下だけだった。その行為を何回もしていた。最初はビクッとしていたがそう何回もおんなじことが立て続けに起こりもうなれてしまった。

「寝室はこの部屋か」

もう何十回も同じようなドアをあけてきたが今回で当たりだったらしい。一台のベットと机、本棚、大きめな窓と結構シンプルなものだ。　ガタッ・・・・又だ、後ろを見るとやはり何も無かった。ため息をつきながら寝室に入るとそこには

「うらめしや」

お化けの代名詞ともいえる台詞を俺に向けてさっきまでいなかったはずの少女が告げた。

第三願　やっぱ自分の家は落ち着く（後書き）

いかがでしたでしょうか？
ちなみにお化けの台詞でしたが小傘ちゃんではないですよｗ
次話はどんな話になるかは自分には皆目見当が付きませんｗｗｗ

感想は大歓迎です！

第四会　居候ができた！（前書き）

この話は今日二回書きました。
どういう意味なのかはいたってシンプルで新規小説に書いて保存しようとしたらなぜかウィンドウが落ち書いた文がパーと化しました。
それでは第４会をお楽しみ（できればですが）下さい

第四会　居候ができた！

「うらめしや」

・・・・誰だこいつ

「うっうらめしやー」

二回も言ってきた。さっきの出来事で何か出てきそうだと思っていたが本当に変な奴が出てきやがった。こいつの容姿は金髪で黄色の目、青と白のフリルがついたロリータ風の夏服、フリルがついた青と白のスカート、赤いリボンがついた帽子、白い手袋を装着したロリッな少女だ。
お化け定番の台詞を言ってきているのだが姿はハッキリしている上、かわいらしい外見のためこれっぽっちも怖くない。しかし何故かは知らないが見たことがあるようなないような気がする。

「ちょっと～無視しないでくれるかしら～」

「どっから湧いてきたんだ、というかお前誰だよ」

「湧いてきたって・・・わたしは蝿じゃないわ。それに人に名前を尋ねるときはまずは自分から名乗るべきじゃないかしら？」

確かにそうだな。

「狂歌　幽月だ。」

「わたしはカナ・アナベラルよ。騒霊（ポルターガイスト）なんてものをやってるわ」

思い出した。夢時空に出てくるキャラだ。確かＥｘアタックやボスアタックで鳥が出てくるから小兎姫に鳥屋だと思われてたはず。

「もしかしてここはお前の家なのか？だとしたら出て行くが」

「いいえ違うわよ。わたしは前いたところではもう怖がられなかったし相手にされなかったから適当に見つけたここに移り住んで（憑いて）みただけよ～」

「でも俺は最初から驚きもしなかったがな」

逆に驚いたり怖がったりする方が至難の業じゃないか？

「それもそうねぇ、でも移ってまたすぐにどこかへ行くっていうのも癪だからしばらくここに住んでもいいかしら？」

「この館、無駄にデカイから構わないぞ」

「あらありがとう。じゃあ遠慮なく使わせてもらうわね」

こいつは結構自分勝手な奴だ。だがこいつがいるだけで話し相手になるだろうから退屈しのぎにもなる、この館は2人でも大きすぎるぐらいだある上に第一追い出す理由が無いため許可をだした。

「しかしどこで寝るつもりだ？この部屋は1人部屋だから2人で寝るには狭いだろう」

「それは後で探すわ。これだけ広ければ客間の1つや2つぐらいあるでしょ」

そうだな。しかしもう少し話していたいとこだが今日だけで結構なことをしたためかなり眠い。

「すまねーが何かあったら明日にしてくれないか？もともと寝ようとしてたわけだし」

「しょうがないわねー、それじゃあ明日は早朝からわたしに付き合ってもらうわよ」

俺が「へいへい」と答えるとカナは消えていった。代わりにカナがいたところには大量の鳥が出現した。・・・・消えるのって流行ってるのか？そしてこの鳥を俺にどうしろっていうんだ。

眠くて考えるのもめんどくさい、明日考えよう。

「幽月に向かって道路標識をドーン！！超エキサイティング！！！」

「ぐぼえっ」

最悪な目覚めだ、時計などが無いため時間は分からないが結構早い時間帯だろう。
しかしこいつ、人の起こし方ってのを知らないらしい。こいつの起こし方が悪いため今俺は壊れたベットに埋まりその上に道路標識が刺さってるていうとても珍しい状況の中にいる。
痛みが見た目と反してそれほど無いため標識を抜くと刺さっていた部分がみるみる治ってきた。改めて今の俺は人間じゃないことを知った。

「おまえ、なんてことしてくれるんだよ。おかげでベットがご臨終じゃねーか」

「ふふふ、起きるのが遅い方が悪いわ。それに昨日言ったじゃない『早朝から』って」

そんな無茶苦茶なことがあってたまるか。起きるのが遅いってだけでベットを壊され標識を体に刺されるなんてありえない。・・・・・標識なんてどこにあったんだよ。

「それで？こんな早朝からどこに行く気なんだ？」

「夢幻世界に行って見たいと思ったのよ」

そこにいったら俺は確実に死・・・なないか。たしか夢幻世界は時間や命とかの概念は無いんだっけか？

「でもどうやって行く気だ？俺は残念ながらお前みたいに消えたり飛んだりすることは出来ないんだが」

「なら飛ばずに歩いて行けばいいんじゃない？お弁当もってピクニ

ックみたいに」

死亡フラグ全快な世界にピクニックしに行くやつなんて果たしてこの世にゃいるんだろうか？

答えはＹｅｓだ。目の前のこいつがいる。

「移動手段はわかったが夢幻世界ってどこにあるんだ？」

「知らないわ。行けばいずれ分かるでしょう」

・・・俺は当分こいつに振り回されるだろう。

第四会　居候ができた！（後書き）

はい糖類おぅです。
最初はまさかの旧作キャラでしたねｗｗ
カナってこんな性格なんだろうか？
夢時空やったときはあんまりつかめなったしｗｉｋｉには精神の不安定な少女から生まれたその一面って書いてあるし

次回はオリキャラ出ると思います。（バベルの塔は建ってません）

明日明後日、もしかしたら更新できないかもしれません。
でも最低でも火曜までにはしますのでご安心？を
ではではー
感想はいつでも大歓迎です！よろしければ書いて下さると自分は発狂しながら喜びます

第五行　夢幻世界に向けてＬｅｔ’ｓ　Ｇｏ！！！（前書き）

はい、糖類おぅです
なんとか火曜日までに書きました。（火曜までだから明日もセーフだったけれど）
最初にお詫びです。オリキャラが出るって言いましたが後半（といっても短い文だけど）にちょこっとしか出ません。
オリキャラはあんま考えるのが面倒なので数は限られると思います。
それでは第五行をお楽しみ（出来るわけないけど）下さい！

第五行　夢幻世界に向けてＬｅｔ' ｓ　Ｇｏ！！！

夢幻世界（死の世界）へ行くことが決定したので俺たちは屋久間に頼み食料などを貰い弁当を作った。
食料を貰ったとき屋久間が自分達で手に入れろとかほざいてたがそんなこたぁ知ったこっちゃ無い。弁当を作るときカナは標識を持ってきた。・・・・だから標識なんてどこから取ってきたんだよ。あいつに任せると大変危ない料理になりそうだったので俺１人で作った。

そんなことがあって只今夢幻世界の境目に多分向かって歩いている。多分なので合ってるかどうかも分からないのでもうかれこれ２，３時間は歩きっぱなしだ。
しかも緑一色で同じような風景がずっと続いているのでちゃんと進んでいるのか感覚がつかめない。南極や北極でずっと銀世界が続くと止まってるように感じるのと似ていると思う。

「なあ」

「ん？なにかしら」

「こっちであってんのか？」

「知らないわよ」

知らないじゃないだろ、確かに知らないって行く前も言ってたけどさ。

「お前、飽きないのかよ」

「飽きるわけないじゃない」

嘘だ！！！こんな進展しない空間に長時間いて耐えられるはずが無い。仮に本当なら不公平すぎるぞ。

「そんなにつまらないなら弾幕ごっこでもするかしら？」

「遠慮しとく」

え？退屈嫌いなくせになんでやらないかって？愚問だな、俺は弾幕・・・というか弾すら撃てないのに勝てるわけない。それにこの時代の弾幕ごっこならスペルカードなんぞないのでガチの殺り合いだからだ。こんなとこで死んじまうなんてつまらなすぎる。

「じゃあどうするのかしら？歩くも飽きた、弾幕ごっこもヤダなんて自分勝手ね～」

「どっちがだよ」

普通勝手に居候決める奴や死への片道切符を独断で2人分買う奴を自分勝手というんじゃないか？

「質問なんだけどいいかしら？」

「今度はなんだ」

「あなたってどれ位生きているのかしら？その尋常じゃない妖気からして相当の歳だと思うけど」

・・・聞くの遅くないか？朝だって言えただろ。

「昨日だ」

「・・・・え？聞き間違いかしら昨日って聞こえたのだけれど」

「聞き間違いじゃねーぜ、昨日生まれた」

やっぱ驚くだろう、俺も歩いてる途中に近くにいた弱小妖怪が顔を真っ青にして尾っぽまいて逃げてったのには驚いた。

「だったらよく耐えたわね、普通じゃ体がもたずにパーンってなるわよ」

「俺に普通は通用しない」

通用していたらとっくにとうに死んでらぁ。

「後、もうひとつ質問があるのよ」

「なんか嫌な予感がするんだが」

「此処、どこかしら」

予感的中しちまった。つーか、どこかしらじゃねーだろ。

「俺からも質問だが、じゃあさっきまで何でこの方向に向かって歩いてきたんだ？」

「なんとなくよ～」

薄々は分かってたがやっぱりあてずっぽかよ。

「帰り道覚えてるのか？」

「そんなわけないじゃない」

聞くんじゃなかった・・・

「それで・・・これからどうすんｄ（づどーーん

「なんだ？なんか落ちたみたいだが」

「自分の台詞遮られても普通に対処するのね・・・というか落ちるような音じゃなかったでしょ」

音がした方向を見るともくもくと煙が上がっている。

「あら、あそこじゃないかしら。どうする？行くのかしら？」

「当たりめーだ」

そういやあたり前田のクラッカーって懐かしいな。べつにどうってわけねーけど。

煙があがっていた場所へ向かうと小規模なクレーターが出来ていた。よく見るとクレーターの中に何かいる様だ。動く様子が感じられないので近づいてみると気絶している少女がいた。

「だれかしら？飛ぶのをミスして落っこちたって感じじゃないわよね～」

「真っ逆さまに落ちたって感じだな」

ほおって置くのはすこしばかり可哀想なので起こしてやることにした。

「起きる気配がねーなぁ、しょうがねーな。カナやれ」

「りょ～かいよ、エイヤっ」

グシャッと実に不快な音がした。

「ってえええええええ」

少女は目を覚ましたようだ。目を覚ましたってことはこいつは人間じゃねーな。人間だったら起きることなく寝続けることになるからな。

「なっなにしやがる」

「「起こしただけ（よ～）」」

「嘘をつくな！嘘を。こんな乱暴な起こし方があるか！」

「あるんだよ残念ながら」

本当に残念だがな。

「それは置いといて、あなたは何者かしら？」

「普通聞く方が名乗ってからじゃないのか？」

「わたしが先に聞いたのだもの、あなたが先に言うべきだわ」

ええぇーー、何だよそれ。絶対に自分から名乗らないのかよ。

「・・・しょうがないな、俺の名は・・・・・俺は・・・・・あれ？わからない」

・・・まずくないか？もしさっきの一撃で記憶吹っ飛んでたら最悪だぞ。

「あらそうなの、残念ね。それじゃあ私は名乗らないわ」

どうやったらそういう返答がでるんだよ。

「残念なのはお前の頭の方だよ。しゃーないなおまえのことは後回しで、俺は狂歌　幽月だ。このバカはカナだ」

「バカってひどいわよ」

「酷くねーよ。それでだが、お前の出来る限り覚えてることを教えてくれないか？もしかしたら思い出せるかもしれないぜ」

「確か学校帰りにコンビニ行こうとおもって歩く方向を変えたらいきなり視界が真っ暗になって、気が付いたらよくわかんねー男がいて俺を旅に行かすっていったら又視界が暗くなって・・・」

「そんで気付いたら落ちてたと」

「ああそうだ」

どうやら屋久間のヤローが犠牲者を故意に出したようだ。あとでしばいておこう。

「お前、いくあてないだろ？」

「まあそうだな」

「だったら俺のとこにこないか？」

第五行　夢幻世界に向けてＬｅｔ’ｓ　Ｇｏ！！！（後書き）

Q，いかがでしたでしょうか？
A，ゴミ以下

明日も投稿すると思います！
感想、アドバイス、駄目だし、誤字脱字なんでもけっこうです！
何かありましたら感想に書き込んじゃってください！

第六驚　二次元の俺っ娘ってすんごい良いよね（前書き）

呼ばれなくても飛び出てぎゃははは―！糖類おぅです
なんか後半から結構はしたない感じのないようになってます
あいかわらず文才はないですのでなんぞこれ目が腐るってなると思います

それでは第六驚を楽しめるわけ無いですがどうぞー

第六驚　二次元の俺っ娘ってすんごい良いよね

「だったら俺のとこにこないか？」

「・・・いいのか？」

「いいから言ってんだろ」

こいつはさっきから上目使いをずっと使用してきてる。これじゃ、目覚めたからじゃあなってほっとけないだろ。

「後、お前名前忘れたんなら不便だし俺が仮の名前つけてやろーか？」

「別に構わんが変なのにするなよ」

・・・・変な名前は無しか、結構キツいな。

「キツくねーだろ、つか俺が言わなかったら変なのにする気だったのかよ」

空から落ちてきたからなぁ、それに因んだ名前で良いか。

「・・・・・落雲（おちぐも）　空（うつ）とかどうだ？」

「苗字まで考えたのかよ、でも気に入ったぜ」

気に入ってくれて何よりだ。

「なあ、俺も何かお前らにしたいんだが。恩売られっぱなしは嫌だからな」

こいつはどっかの空気状態になってるバカとは違い礼儀がなってるようで少し安心した。

これで2人目の問題児なんて出たら俺は耐え切れない。耐えられるわけが無い。

「じゃあひとつ頼みがあるんだが」

「なんだ？俺に出来ることなら何でも言ってくれ！」

なんかこいつかわいいな。

「こっから夢幻世界まで案内してくれねーか」

「今さっきここに落ちてきた俺に案内しろと言うのかよ」

「「言うのさ（よ）」」

カナがやっと会話に参加し始めた。

「いやごめんそれ無理だわ」

何でもって言った癖にそりゃねーだろうが。

「じゃあどこにあるかわかるか？」

転生する前、東方を知らなきゃ元も子もない話だが賭けてみるのも

いいだろ。

「夢幻世界って確か博麗神社の裏山の湖にあるんじゃなかったっけか？」

・・・・マジでか、全然知らなかった。そうとなりゃ行き先も決まったわけだ。

「場所がわかったのは良いけど此処が何処かわからない以上意味が無いわね」

そうだった、結局さっきの状態から1人加わっただけであんまし変わってねーじゃんか。

「おいおいどうするんだよ」

「それが分かったら苦労しねーよ」

さて、これからどうしようか。（ドゴオオオオオオオオオン！！！

「なんだ？カナ、おめー標識ふっ飛ばしちまったのか？だから振舞わすなって言っただろうが」

「初耳よそんなの」

「いやあの轟音でその感想はねーだろ！」

あんぐらいでそんな根をあげてるようじゃまだまだだな。

「キシャアアアアアアアァァー！！！！！！！！」

「おいカナ、そんな下品な声上げんなよ。驚いちまったじゃねーかよ」

「私じゃないわ、空じゃないのかしら？」

「俺じゃねーだろ！どう考えても目の前にいる怪物だようよ！！」

そういわれて前を見てみるとどこが口なのかわかんない生物がいた。そいつはイソギンチャクを巨大化させた感じのモンスターだった。触手が結構卑猥な形をしてらぁ、ムーンライトノーベルとかじゃこっからあんなことやこんなことが開始するだろう。しかしこの小説はにじファンだからそんなことはＢＡＮされちまうから絶対にない。・・・・って俺はなにを言ってんだろう。

「どうすんだこいつ。戦うんだとしたら残念ながら俺は妖力は腐るほどあるがよ使いかたしらねーんだよ」

畜生、こんな奴と暴れたかったなぁ。

「俺はまず戦力外確定だろ」

確かに空にゃ無理があるな。となると戦力となる奴が1人となったため俺と空はカナを見つめる。

「なによそんなに見つめて～、もしかしてわたしに惚れちゃったのかしら？」

「誰が惚れるか」

「酷いわね～、ちなみにわたしも無理よ～」

「なんでだ？」

「めんどくさいに決まってるじゃない」

「そうか、ならしかたねーな」

めんどいならそりゃ無理だな。とりあえず逃げる準備でもすっか。

「いやいやいや、めんどいならしかたねーってどうゆうことだよ！やれよ！」

「そんなことといってるうちにどんどこ敵さんの触手は迫ってきてんだがな」

もう１ｍもねーな。

「うっうわなんだこいつら、気持ち悪りぃ」

少女に絡みつく触手、これは眼福だな。

「いい眺めだな」

「いい眺めね」

「見てないで助けろおおおお！って無いいい！？」

何が無いって言うんだよ、ナニか？

「なんで俺のアイデンティティーが何でねえええんだよおおお！」

ビンゴかよ、昨日といい今日といい俺の勘がほとばしってるな。というかナニが有ったってことは性転換俺っ娘ってことか。屋久間のやつそれ狙ったな。しょうがない今回ばかりは見逃してやらぁ。

「取れたんじゃないのかしら？」

こいつはこいつですんごいこと言うな。俺も人のこと言えないけどよ。

「あんなもん取り外し効くわけねーだろうが！」

おい勲章をあんなもん呼ばわりすんな、とっても大事なモンなんだぞ。

「そんなことより助けろよおおおお、、ってうわぁ」

刹那、巨大イソギンチャクに大量の札が刺さり空は触手から開放され地面に落ちた。

札の飛んできた来た方を見ると黒に赤という変わった巫女服を着た少女がいた。

第六驚　二次元の俺っ娘ってすんごい良いよね（後書き）

なにやらまた新キャラ臭がしますねｗｗまあ実際そうなんですがもうお分かりですよねｗｗ柄が色々とおかしいですけどｗｗ
うーむ、これ書いた直後の感想が「下手糞だな、さすが俺下手糞」っていうのと「下ネタすぎ、さすが俺煩悩」が浮かびました。
ちくせう本読むのが好きだから文庫本とか読んで文構成を参考にしようと思ったら自分の頭のスペックじゃできなかったｗｗｗ

明日も更新したいですね、キャラせってー更新しときます

感想、クレーム、アドバイス、駄目だし、誤字脱字、適当に思いついたこと
何でも構いません、何かありましたら感想やらどこにでも書きこしてください←批判ばっかじゃないかってびくびくしてる

それでは次回お会いしませう！ばいばばーい！

第七言　博麗さん現る（前書き）

すみませんなぜか投稿できないという症状があり昨日更新すると言ったのに遅れてしまいました。

第七言　博麗さん現る

よーっす皆大好きお兄さん幽月さんだぜ！
軽く今の状況を説明するぞ。ざっくり言おう、先程空を襲っていたイソギンチャクらしきものを瞬殺した巫女服の女に殺られそうだ。

「あんた、正直に言いいなさい。その馬鹿みたいな量の妖力はなにかしら？」

「俺の妖力だが何か」

「私は鬼子母神や天魔とか紫みたいな妖力を大量に持った大妖怪に会った事あるけど、あんたの妖力に比べたら足元にも及ばない位なのよ。何者なのよ」

「俺は俺だ」

「封印されたいみたいね、そこに直りなさい。負けるかもしれないけど」

妖力だけで実力を決められちまったら困るぜ。妖力は凄いかも知れねーけど使い方分かんねーんだよ。相手したらきっと俺の実力に驚くぜ、嫌な意味で。

「大丈夫だ話しにもならんぐらい俺は弱いから」

「嘘をつくな、じゃあその妖力は何なのよ。それだけの量があったら相当の年月生きてきたはずよ。それなら相当強いじゃない」

「相当の年月っていわれてもなぁ、絶対おまえより俺年下だから」
嘘などこれっぽっち言ってないのになぜ信じねーんだよ。少し無理があるかもしれねーどよ。
「私を侮辱してるつもりかしら？私まだピチピチの１８なんだけど」
「俺、生後二日」
「え、まじでか！？」
空にゃまだ言ってなかったっけか？
「生後二日って・・・・じゃあ産まれたときからその妖力を持ってたということなの？」
「そうだっつーの、だからそんな赤ん坊みたいなひ弱と殺ってもしゃーねーだろ」
「生後二日の赤ん坊がそんなペラペラ喋ってたら世の中の母親や父親はショック死するわよ」
そんなこと知ったこっちゃねーよ。第一俺だって嫌だわ。
「で？そのペラペラ喋る赤ん坊と騒霊と妖怪をどうするつもりだよ」
「しばらく私のうちで暮らしてもらうわ、幻想郷のパワーバランスがあんた一人で相当グラつくんだから。それにもし幻想郷に害があるようだったら消さなきゃいけないしね」

変な巫女服着た女の家ってどんなだ？今思い浮かべられるのは俺たちが向かおうとしてた場所付近だと思うんだが。

「暮らすぐらいなら構わないけどあなたの家ってどこにあるのかしら？巫女服って変わってるから変な家だったら嫌よ」

「巫女服着てるとこから察しなさいよ。神社よ神社、博麗神社よ」

・・・・今日は結構ツいてるな俺ら。

「あらそれは好都合じゃない、どの道通る予定だったんだもの」

「確かにそうだなでも何時開放されるかわからねーんだぞどうすんだ？」

「そんときはそんときだ、脱走なり脱走なり脱走すりゃいいだろ」

「いやそれ脱走いがいねーのかよ！？」

逆にそれ以外あるってのか？戦闘なんて相手の八百長試合になるだけだぞ。

「ごちゃごちゃ五月蝿いわね、ほらさっさと行くわよ」

「へいへい」

少年少女祈祷中・・・（祈祷もなにも移動しかしていない）

「ここが博麗神社よ」

「すまない、階段が長くて神社本体が見えないのだが」

本当に長いな、これを歩いて登りきれってか？御免被りたい話だがことわりゃその時点で俺の妖生終了の合図になるな。

「「私は普通に登るのは疲れちゃうから飛んでいくわ。後よろしくね～」」

一文字も間違えずにこの巫女＆騒霊は同じ台詞言って飛んで行きやがった、畜生め。

「はぁ、行くしかないな」

「だな」

ここで立ち止まってもしゃーねーからな。

１５分経過・・・

「ぜぇぜぇ・・・・やっと登りきった」

「空、疲れたからって寝そべるなんてだらしねえな。俺を見習えよ、もっとシャキッとしろよ」

全く体力無さすぎだろ。だから最近の若者は云々言われるんだぞ。

「ふざけんじゃねーよ！お前途中でいきなり飛べるようになりやがって、しかも俺に見れびらかすみたいにグルグルゆっくり飛びやがってよ」

そう、この俺は駄目もとでギャク日の聖徳太子みたいにシャイニング摂政ポセイドンっていいながらジャンプしたら飛べてしまったのだ。

「練習もしないで飛べるようになるなんてますます危険ね」

なぜそうなるよ、博麗の巫女さんよ。

「あら飛べるようになったの、なら弾幕もすぐに撃てそうね」

「そーかもな」

「で、神社にも着いたがこれからどうするんだ？」

「そうねぇ、神社の掃除とか洗濯とかご飯の支度や人里に神社の宣伝でもしてもらおうかしら」

うわーお、この巫女さん俺らに仕事ぜんぶ任せるつもりだ。

「前半はともかく後半の人里に宣伝ってあなたがわざわざ危険だと思った私たちを人里に行かせるってどうなのかしら」

「いいのよ、なんかしたらただじゃおかないし。それに騒霊や妖怪も受け入れる神社ってことで売れるかもしれないじゃない」

どうやら博麗の家計は皆、金に目が無いようだ。

「あとは・・・・自己紹介ぐらいかしらね。私は博麗　霊香(れいか)よ」

「俺から順に狂歌　幽月、カナ・アナベラル、落雲　空だ」

何かボケをかまそうかとも思ったが何事もはじめが大事って言うからあえて普通にしてみた。

「そう、じゃあこれから長くなるけどよろしくね」

・・・・・あれ、長くなるのかよ。館作って貰った意味ねーじゃねーかよ。

「つっこむとこそこかよ！？」

第七言　博麗さん現る（後書き）

感想などはいつでもお待ちしてます。

魔界や夢幻世界の説明を書いた方がいいでしょうか

第八戦　弁慶の泣き所って本当に当たると痛い（泣）（前書き）

こんばんはー、更新出来そうに無いって言ったのに書けました。
といっても疲労が半端無いので誤字脱字などの点検が厳かになってると思います。
見つけ次第渇を入れてください

それでは第八戦を楽しめないのでご注意しながらお読みください。
どうぞー

第八戦　弁慶の泣き所って本当に当たると痛い（泣）

博麗神社に強制的に滞在することのなった俺たちはとりあえず境内の掃き掃除と廊下の雑巾がけをした。
掃除の途中、霊香が茶の間でくつろいでたので雑巾を顔に投げてやった、それも思いっきりに。俺は異常な妖怪スペックだから普通の人間が食らったら１００％首がもげて辺りに華を咲かすはずなのに奴は吹っ飛んだだけだった。それで起き上がったあいつは頭に大層立派な四つ角を作り殺気をたてながら俺を睨んできやがった。下手すりゃ大惨事になるところだったが空が必死に俺らを止めたため難を逃れた。

そんなこんなことがあり、今は縁側で茶を啜ってる。西にお天道様が落ち始めているので空一面真っ赤だ。もうじき夕飯の用意がどうたらこうたら言ってきそうなので今のうちトンズラをこうと思う。こちとら朝から弁当作ったり、親方っ！空から女の子が！ってなったりしてたんだ。少しぐらい休んでもいいと思う。え？現在進行形で休んでるって？そりゃ言わない約束だぜ。

「そんじゃ、そこら辺ブラブラしますかね」

行き先決めてねーからなぁ。まぁとりあえず飛んで空中散歩でもすっかな。

飛んでそんなに経ってねぇが、やっぱりもといた世界じゃ見られない自然溢れる世界なこった。
見てるだけでスカッとすらぁ。

・・・・・・・なんか下が騒がしいな、せっかく気分爽快だったのによ。
このまま素通りするのはちょいと惜しいな・・・・・しゃーねーな、いっちょ行ってみますかね。

「まだか！？まだ見つからないのか！？」

「早くしなければ夜になるぞ！」

「駄目だ、こっちにはいなかった！」

なんだなんだ？良い年したおっさんや青年が武装して血眼でなんかさがしてらぁ。
こっそり近づいて何探しに行くか調べてみようかねぃ。んじゃま、気配を消して・・・・は出来ないが息殺していりゃ、慌ててるあいつらにゃ気付かれるわけねーだろ。

「な、何奴！？」

・・・・・・ええぇぇぇぇ何だよそれ、開始1分も経ってねーじゃんか。

「俺は俺だが何か」

「だっ黙れ妖怪め！・・・・・・・まっまさか！俺たちよりも花子を早く見つけ出して食うつもりか！？」

おいおいおい、なんでそうなんだよ。なんかテンプレ臭がすんだが。しかも花子って昭和感が溢れ出してとどまることをしらねーぞ。それに人食うなんてもうやめたしな。

「いやなんでだよ。俺はなー、のんびり空中散歩をエンジョイしてたのによー。てめーらがぎゃーぎゃーうるせーから何事だって思って来ただけだぜ」

「妖怪の言うことなんて信じられるか！」

ひでーなおい。しかもまわりも「そうだそうだ！」とか言うなよ、なんか俺がいじめられてる哀れな子みてーじゃねーかよ。

「お前達は先にいけ！こいつは俺たちが食い止める！」

なーんか死亡フラグビンビンなことを言いやがったぞこいつら。殺しちまうのも面白そうだがそんなことしたら霊香に存在を消されそうだからよしとこう。全員気絶ってとこかね？

「チェストー（棒読み）」

適当に腕を振り回したらあら不思議。風が起こりむさい男たちを吹き飛ばして気絶させたではありませんか！・・・・やべーなおい、楽しくてしゃーねーな。ってもう全員意識飛んじまったのかよ、はえーなおい。

ちょいと時間が経って、現在俺はあいつらのいっていた花子を探している。

「といっても特徴もわかんねーからどうしようもねーな」

あーあ、もう帰っちまおうかな。「きゃあああああ」っておう符。自分から位置を知らせてくれるたーなかなか気遣いが出来るガキだ。だが、もう少し普通に教えてくれりゃ良かったんだがな。これじゃ襲われる数秒前みてーじゃねーかよ。・・・・・・・急ぐか。

やっと見つけたぜ。ついでにとっても、そりゃとっても大きな蜘蛛と一緒に。

「いや・・・こないでぇ」

ありまガキんちょが半泣きだ。まあ当たり前なんだがな。

「おーいでーじょぶかー？」

どっかの正義のヒーロー的な登場だぜ！といっても妖力を開放してニヤニヤ笑いながら近づいてるだけなんだがな。

「ナンダ、キサマ？」

ちきしょう、なんでビデオもってきてなかったんだよ。喋る蜘蛛なんてそうそういねーのに。

「俺は俺だ」

もうこの台詞を俺のきめ台詞にしようかね。

「フザケルナ、オマエカラコロシテヤル」

って言いながら足をこっちに振り下ろしてきやがった。

「おっとっと」

なんとか避けたがあたったらこれ洒落になんねーな。

「んじゃこいつの切れ味、試してみますかね」

番傘を試したかったんだが生憎神社に置いてきちまったから太刀にした。

刀の持ち方は八相にしてと。適当に北見一刀流の風雅をしますかね、うろ覚えだがな。

「せいや、でりゃよっと」

最初は正面で3発目に思いっきり右足を前に出し相手の左に付く。

そこで流れるように切り続ける。

「グギャアアァァァ・・・」

ズズンと音をたてながら蜘蛛は倒れた。つーかまだ数えられるぐらいしか剣を振ってねーぞ。しかも蜘蛛の足がバターみたいに切れやがって。スゲーなおい。

「そんで、怪我はねーかい？嬢ちゃんよぉ」

俺は顔に緑色の血を付けながら出来る限り妖力抑えて話しかけた。

第八戦　弁慶の泣き所って本当に当たると痛い（泣）（後書き）

実は初の戦闘回なんです・・・・・が短い！みじか過ぎるよ！
そういや真剣って実は人を3，４人切っちゃうともう切れなくなるんですよね。
本物は実家に有るので行く度に見たり振ったりしますけど、重いです。
ちなみに幽月さんが使ってる刀諸々は神様の加護（笑）がついてるので何人切っても手入れをすれば無制限で切れるようにしてあります。というか今決めました（ぇ

感想なりクレームなりアドバイスなり何なりお申し付けください！
実はアンケートしようかしないか考えてたり↑釣りとかじゃないです、皆様の反応で決めたいと思います（といってもそんなに大したものじゃないんですがね）

それでは又次回でお会いしませう！ばいばばーい

第九打　ひとざと！（前書き）

いつにもまして駄文です

どうやって投稿したかというとｔｘｔファイルをｐｓｐに入れて新規小説のとこのファイル投稿で行いました！

長らくお待たせしてこの出来映え・・・自分がヘボすぎて泣けるぅ！
そこに痺れぬ！憧れぬぅ！
それでは第九打です。どうぞ～

第九打　ひとざと！

「そんで、怪我はねーかい？嬢ちゃんよぉ」

「は・・・はい」

辛うじて聞こえるぐらい小さな声だな。まあ、さっきまで襲われてたんだししゃーねか。

「おめーが花子か？」

「そう・・・です」

「なんでこんな時間帯に人里を離れたんだ？」

「お母さんが風邪で・・・・それで慧音先生にきいたらこの辺りに風邪に良く効く薬草が生えてるっていってたから」

なんともまぁ親孝行ながきんちょなこった。

「けどよ、薬草探しに行ってそのままポックリ逝っちまったらどうすんだよ？」

「うっ・・・・それは、その」

「だろ？母親気遣うのはいいがな、一人でぶらつくのは今度から止せよ」

「・・・はい」

って良く見りゃこいつ右足怪我してらぁ、うわっドクドク血が出てきやがる。これじゃ歩くことは無理だな。

「おいお前、足怪我してんだろ？ほら、おぶってやっから道案内しろよ？」

「でも・・・」

「その足じゃ歩くなんて無理だろ？そーゆーときは素直に甘えろや」

そんでもって少しづつ、ためらいながら俺の背中に乗っかった。ためらうのは俺の着物が汚れるからって理由だろうけど、俺のことが単純に嫌っても感じられる・・・・・なんか悲しくなってきた。

「あっあの」

「ん？どーした、足でもいてーのか？」

「そうじゃなくて、彼方のお名前を聞こうと・・・」

「聞いてどーするんだ？」

「慧音先生に困ったときに助けてもらったりしたら相手の名前を聞くように言われてるから」

そうゆうことか、原作でも真面目な性格のけーねさんだからそういったことはキチンと教えるらしいな。
寺子屋にカナを預けてみたら少しは性格改善するかな？

「幽月だ、妖怪の幽月。そう覚えとけ」

・・・あり？いきなり花子の顔が真っ青になりやがった。・・・ああ、妖怪って聞いたからか。

「心配すんな、別にお前を取って食おうなんて思っちゃいねーよ。そんなことすんのは妖力の少ない妖怪だけだ」

「幽月様はなんで私を助けたんですか？妖怪はどんな人でも殺そうとしているってみんな言ってたのに」

「そりゃ、俺は俺だからだよ。最初はオッサンどもが目を血走らせてたからなんだと思ってよ、近づいたらお前が見つからないってことだったらしくてな。暇つぶし程度にお前を探してみたんだよ」

「変わったお人なんですね、幽月様って」

「だから俺だからさ。あと様付けは止してくれねーか？なんか俺が変態に思われそうで怖い」

「そうなんですか？じゃあ幽月さんで」

決めるのはえーな。

そんな話のやり取りがあってやっとこさ人里に着いたわけなんだが、やはり花子の言ってた通り皆俺を恐怖だったり怒りだったりそういった目で見てくる。・・・・・こんなときでやっぱり自分はおかしいとおもう。だってこんな目で見られれば普通は嫌がったり逃げたりするはずだ。だか俺の場合、そういった異教徒を見るような目が心地よく感じてしまう。・・・モットソンナ目デ見ロ、俺ヲ苦シマセロ、俺ヲ追イ詰メテミロ、俺ヲ壊シテミロ。ソシテ俺ガ壊シテヤル、犯シテヤル、泣カシテヤル、殺シテヤル
っと危ない危ない、危うく暴走するとこだった。ってなんだ？いつの間にか周りをかこまれてらぁ。
なんだかさっきも同じようなこと無かったか？

「その子をどうするつもりだ！」

「妖怪は出てけ！」

やっぱりこんな感じか、こりゃ早く花子返して帰った方が身のためだな。

「こっこれでも食らえ！」

後ろからそんな声がして振り向くと拳大ぐらいの大きさの石が頭に直撃しやがった。
・・・・当たりどこがちょいと悪かったな、クラクラすらぁ。だめだ、ぶっ倒れる・・・

「知らない天井だ」

一話から言えなかった言葉をようやく言えた。
頭には包帯が巻いてある。ってことは誰かが治療してくれたってことか。

「ああ、気が付いたか」

声のした方向を見るとＣａｖｅｄ！！！！でおなじみの上白沢　慧音さんがいた。
・・・・このやり取り、前にしたな。

「すまなかった、うちの生徒を助けてくれたとはしらず里の者が彼方に失礼なことをしてしまった」

おいおい、起きて早々謝られるってどういうこった。

「べつになんともおもっちゃねーから安心しやがれ。んなことより花子はどうした？」

「花子ならほらそこに」

みてみりゃ俺の隣の布団で寝てた。かわいらしい寝息を立ててるのだが額が青い、そりゃもう鈍器で殴られたみたいに。

「心中後察知します」

「なぜそんな言葉がでるんだ」

「お前がお説教したらトチって・・・・」

「殺してない、頭突きしただけだ」

なんで説教で頭突きなんだよ、普通は拳骨とかじゃないのか？

「頭突きでこんなになるって、どうゆうことだよ」

「私は石頭だからな」

いや石頭でもこれはねーだろう。

トントンと戸を叩く音がした。

「む、誰か着たようだ。すまないが少し待っててくれ」

そういうとけーねは戸に向かって歩いていった。

そんでもってけーねが帰ってきた。

「本当に申し訳ない」

俺に土下座する男を連れて。・・・これ、さっきからなんの嫌がらせだよ。

「いや、顔をあげてくれ。そこまで謝られると逆にこっちがいずらくなる」

「しっしかし・・・」

男の話からするとこの男は花子の父親で、夢中で娘を探し一旦里へ帰ってきたところ妖怪である俺が花子をおぶってるのを見て連れ去っていくように勘違いしそこらにあった石で俺を攻撃したらしい。

「でもよ、妖怪相手にそんなことできるってのは余程娘が大事だってことだろ？」

「そりゃもちろんですが」

「ならその愛情に免じて今回のことは無しにするぜ、だがなこれからは蛮勇もほどほどにな？下手に刺激すると頭が弱そうな妖怪でも人間1人ぐらい軽く殺しちまうからな」

「あっありがとうございます！！」

「さて、俺はこれでお暇させてもらおうかね」

「もうかえってしまうのか？せめてこの子が起きるまでいても良いと思うのだが」

自分でやったくせにそりゃ無いだろうよ。いつのまにかけーねが俺に対して敬語やめてるな。別にどうということはねーけど。

「残念だが俺は一刻も早く帰らないと怖い巫女さんに血祭りにあげられそうだからな、また今度ってことにしといてくれや」

「・・・・なんかすごいことを聞いてしまった気がするのだが」

「気のせいだ」

「ではまた近々来てくれよ？きっとこの子もお前のことを待ってるだろうからな」

「あいよ」

そう答えて俺は神社に向けて全速力で飛んだ。
自分でトンズラこいたくせに情けないと思うかもしれないが、あの巫女さんが怒り心頭で俺に向かってきたらと考えたら鳥肌がたったんだよ。イソギンチャクの二の舞は御免だからな。

神社にもどるとそこは更地だった。正確に言えば神社がグチャッと潰れていた。

「・・・・・今晩どこに泊まるんだよ」

第九打　ひとざと！（後書き）

はい、幽月さんが無駄に男っぽかったり狂気に染まりかけましたね
なんか文が変ですね、とびとびになってます（泣）
これでもがんばってる方なのに、文才無いのかな？
嗚呼無いんだった！あっはっは

そして展開が急すぎるｗｗｗ
正直言っていらない動作多かったんですがただ文字数稼ぎｔ（ｒｙ

感想など何でもかまいません！何かありましたら感想や活動報告などにコメしてくださいな！できるだけ早く対応しますよ～

では次回ノシ

第十怒　夢幻の世界へさぁ逝くぞー（前書き）

こんばんは堕落小浜です。うそです、糖類おぅです
別に私の本名は小浜ではないのであしからず

結構書き溜めしてたんですが全部一回消して構成などを変えました。
あさってから修学旅行とか風邪ひいてる私には鬼畜過ぎますｗｗｗ
では第十怒です。ＤＯ・Ｕ・ＺＯ☆←キモイ

第十怒　夢幻の世界へさぁ逝くぞー

怒られるのが怖くなって猛スピードで神社に帰ってきたわけなんだがその神社はつぶれていた。

・・・・別に浦島太郎とかじゃないよな？実は俺がさっきまでいたとこは人里じゃなくてもしかしたら龍宮城だったとか。だとしたら俺、お土産ももてなしも受けてねーじゃねーかよ。クソッ損したな。

「おーい！幽月ー！どこ行ってたんだ、心配したんだぞ！」

たぶん俺を心配してくれるのはこいつぐらいだろう。

「ちょいと散歩した後、一狩して来た」

「一狩って・・・モンハンかよ」

ちなみに作者はモンハンのやりこみでＰＳＰ２台壊したな。

「まったく、行くなら行くで何か言いなさいよ。心配したじゃないの～かっこ棒読み」

「自分で棒読みとか言うなよ」

こいつは相変わらずだな。

「そんで？なんで神社が潰れてんだ？どうせカナが料理してこうなったんだろうけどよ」

「ひどいわね～、それじゃまるで私が料理できないみたいじゃない」

「実際そうだったろうが。今朝だって標識担いで台所来たくせによ。どこの漢の料理だよ。そんなんで料理したら台所は爆心地になって出来たものは食材の墓場と化すわ」

もうその惨状が頭に浮かんで来る。

「そんなこと無いわよ、ただダークマターが出来てしまうだけよ」

「いや自覚してんのかよ！？」

「自覚してんならまだマシだな。でもやってしまったには変わらない。正直に霊香に謝ってこい。そうすれば許してくれるだろ・・・・・たぶん」

たぶんだ、たぶん。保障なんて絶対に出来やしねーな。

「だから私じゃないわよ」

じゃあ誰だって言うんだよ。というかそれ以外なんて思いつかないぞ。

「あっ居た居た。あんた達、今からお礼参りに行くから準備しなさい」

「「「・・・・・は？」」」

「おいおいずいぶんと急だなお礼参りなんて」

「そりゃ私の大事な大事な神社を壊されて黙ってるわけ無いでしょ」

「それはそうとどこにいくつもりなのかしら」

「幻月と夢月のところよ」

・・・・結局目的地へ行くことのなるのかよ。というか面識あんのかい。

「おいおいおい！なんでそんな危なっかしいとこにいかなくちゃいけないんだよ！」

「なんでって言われても、そこに敵がいるからよ」

なんか地味にカッコイイな。

「なぁ霊香、俺の番傘どこ行った？」

「それならはい、ここにあるけど」

何も無いところからトンと番傘から出現した。どこのスキマ妖怪ですかコノヤロー。

「それじゃ、出発するわよ～」

うわーお結局用意も何もしないままだよ、なんだよこの人。

現在飛んでます、ハイ。とても眠いです、お腹減りました。もうとっくにお天道様は地に落ちて月がこんにちはって言ってくる時間です。

「というわけで疲れた、ダルい、休ませろの三連撃」

「何でよ、嫌よ、置いてくよの三連撃返し」

なんてやつだよ、鬼畜過ぎるぞ。お前やカナはただ飛んでるだけだが俺は空をアンパンを顔に付けてるスーパーマンみたいに背中に乗っけて飛んでんだぞ。

「後どれくらいなのよ、私もいい加減疲れたわ」

「ほら二対一だザマーみろ、大人しく休憩タイムにしやがれ」

「五月蝿いわね、まず手始めにあんた達を血祭りにあげてやるわよ」

なにそれこわい。

「それにもうすぐそこよ」

もうすぐって言われても下は森林のオンパレードで湖なんてねーんだが。

「うわっ！？幽月おまえ居眠りすんじゃねぇ！落ちそうになったじゃないかよ！」

「そりゃすまんかったなー、でもよさっきから風景が一定だとよ眠

くなるんだよ。なんか俺の眠気を吹き飛ばすようなことしてみろよ」

「何その無茶振り！？」

「そうよ～なんかやってみなさいよ、さもなくば私が引きずり落とすわよ」

「無茶振りの上に脅迫かよ！？・・・・もうやだこいつら、疲れる」

疲れるとは侵害だな、俺はただお前の困った顔を見るのが面白いからやるだけなのに。

「ぎゃーぎゃー五月蝿いわよ中二のノリじゃないんだからもう少し大人しくしてなさいよ。それにもう着いたわよ」

駄弁ってたらいつの間にかついたらしいな。つーかこの時代に中二がいるのかよ。

そんでもって湖上空を飛んでたわけだがいきなり隙間みたいなものが出来て引きこまれた。

「ってーな、なんだよずいぶんと手荒い入り方だなおい」

「しょうがないでしょ適当に入ったんだから」

適当にって・・・・ちゃんとやったらどうなんのかいささか気にな

るな。

「ここが夢幻世界なのかしら？なんか変なとこね、来て損した感じだわ」

「お前が言うな」

「変なとこってなによ！」

おお？聞きなれない声がしたと思ったらメイド服を着たパツキンの少女がおりましたとさ。どう見たって夢月だな。

「ちょっと夢月！あんた人の神社つぶすなんて良い度胸してるわね？覚悟は出来てんのかしら」

「もとはといえばあなたがこの世界に勝手に入ってきて姉さんと私を問答無用で襲った後食料もてるだけ奪っていったのが原因なんだけど」

「なんちゅー鬼畜だよ」

「外野は引っ込んでなさい！いいわ、何がどうあれ神社を直しなさい今すぐに。そうすれば半殺しで許してあげるから」

「全然許して無いじゃないの！」

「問答無用！直す気が無いなら嫌でも無理やりにでも修理させてやるわ！」

「そんな理不尽な」

「私の辞書に理不尽なんて言葉は存在しない！」

こうして霊香ｖｓ夢月の戦いがはじまった。

「なんか今回ようやく出れたと思ったらほとんど空気じゃね？俺ら」

「別に出れたから良いじゃない、実はこの話は５話先の話と合体させたせいで出番失ったキャラがいっぱいいるんだから」

「おいそこメタんな」

第十怒　夢幻の世界へさぁ逝くぞー（後書き）

はい、出番を消されたのは言わずともがな夢幻館の方々です。
幽月「作者が嫁をはぶるとは珍しいな」
夢幻世界編が終わったらちゃんと出します。

そしてそして！６４６４ＰＶ＆１０４４ユニークありがとうございます！
感謝感謝です！
幽月「こんなに伸びるとは想定外だったな」
番外編でもやってみようかな、作者の趣味てんこ盛りと皆様の好きなキャラとかで

感想・クレーム・誤字脱字・アドバイス・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十一狂　幽月と幻月（前書き）

藪遅くにこんばんは、糖類おぅです
昨日修学旅行から帰ってきた訳なんですが持っていけなかった我が愛しの恋人である楽器ちゃんといちゃいちゃしまくったので昨日は執筆できませんでした！（お返事はしたけど）
そんでもって今日、ＰＣの前に座ってるんですが手が華扇ちゃん状態です包帯グルグルです。
理由はあれです、エレキ三味線を変なテンションで何時間も弾いてたからです。
手は痛いですが幽雅に咲かせを一応弾けるようになりました！
やったね、糖ちゃん！
和楽器はいいですよ、もう結婚したいくらいです。津軽三味線や長唄三味線欲しいんですがまだそこまで上手くないんで買ってません
（安もんで我慢なぅーです）

ってなわけで第十一狂でっせ！どうぞ～

第十一狂　幽月と幻月

「さぁ始まりました霊香ｖｓ夢月のタイトルマッチ。司会は私ことみんなの汚兄さん幽月でお送りいたします。そして解説にカナさん、ゲストとして夢月選手側である幻月さんにお越しいただきました。カナさん、幻月さん、よろしくお願いします」

「「はいよろしくお願いします」」

「えー今回は二度目の対戦とのことですが、カナさん、これを踏まえてこの試合どう動くとお考えですか？」

「そうですね～、今回二回目なのですから相手の弱点なども分かってきますのでねそこを上手く突いていけた方が勝つんでは無いでしょうかね？」

「なるほど、自分の弱点をカバーしつつ相手の弱点を攻めるという感じですか。幻月さんはどうお考えですか？」

「私はこの試合、かなりの苦戦になるかと思いますねぇ」

「それはどういった理由で？」

「カナさんもおっしゃった通り一度相手をした敵はお互いの攻撃パターンを攻略していくんで簡単に倒すことは難しいと」

「そうですか、これからの対戦の動きが気になりますね。っとぉ！先制を仕掛けたのは霊香選手だ！大量の札を拡散させながら飛ばし夢月選手の動きを封じるのでしょうｋ（ｒｙ」

「おいいいいいいい！お前ら一体何してんだよ！？」

「何だよ妖怪（ひと）が折角スポーツの試合風に小説の文字埋めをしてるってのによ」

「そうよ～、今ちょうど良いトコだったのに邪魔しないでくれるかしら？」

「いや邪魔ってなんだよ！？それとなに相手の姉を連れ込んでんだよ！危ねーだろうが！」

「危ないってに何よ」

「実際そうだろうが！だいたいどうしてこうなったし」

「しゃーねーな、読者もたぶん置いてきぼり状態だろうからとてもとてもこれほどにも無いくらい親切な俺が今の状況を説明しようと思う。

回想ｔｉｍｅドン！」

遡ってちょっと前のこと

「って戦闘をすぐにおっぱじめると思ったらふたりそろってだんまりじゃねーか」

「そうよねぇ。こんななんにもない世界でジッとしていたら頭がど

うにかなってしまいそうよ」

大丈夫だ、お前はすでにイカれている。これ以上の狂いようが無い。

「なら私と遊ばないかしら？」

「誰よあなた。どこから湧いてきたの？」

「初対面の相手に何よ！まぁ私は幻月。そこの霊香の近くにいる娘の姉よ。とりあえず私も暇だから遊びましょうよ」

ここで夢月の姉、幻月の登場。少しばかりご立腹の様子だ。湧いてきたといわれたそりゃ怒るわな。そしてここでの遊びは間違いなく夢幻世界の外でやったらデットオアアライブになるであろう禁ずるざる負えない遊びだろうな。

「遊ぶ前にあいつらの『遊び』を面白おかしくしてみねーか？」

「面白いなら大歓迎よ！」

「私も同じく～」

「ちょっとまて正気かよ！？」

台詞はたぶん誰が言ったかはわかるだろう。

「俺は一度も正気だったこたぁねえぞ」

「ドヤ顔で言われても困るだけなんだが・・・」

「そんなことはどうだっていいからはやくやりましょうよ！」
幻月が滅茶苦茶目を輝かせながせながら俺に催促してきた。
「やり方は至ってシンプルだ。あの二人のドンパチを俺らで解説やら独自の解釈で実況するってだけだ」
「それって面白いのかしら？」
「これ書いてる作者はウィイレは絶対に実況無いと静かで死んじゃうらしいぞ」
「そこまで大事なシステムか？」
「まぁ実際にやってみた方が良いだろ」
「「そうね」」
「えっ本当にやるのかよ！？」
本当も何も最初からそのつもりだったんだがな。

「ってな感じだった」
「納得いかないのは俺だけなのか？」

「最近作者はゆっくり実況とかにはまってるからその影響だと思うぞ」

本当は動画とかでいちいち影響されちゃダメなんだろうがダメな作者は言っても無駄か。

え？前回メタんなって言っといて俺は良いのかって？無論おkだ。

なんせ俺が主人公だからな。

「ぶうううるぅあああああ神社直すか死ぬか選びやがれえええええ」

ありま霊香の奴目がマジだ。あれが博麗の巫女の力ねぇ。幻想郷を監理しなきゃなんねーんだから強いのは当たりまえ、それからで天才かただ優秀な人間で終わるか決まるがおそらくこいつは前者だろうな。

「なら食料を返しなさいっよぉ！」

夢月も神主公認チートに良い感じで応戦してるようだ。

「暇だな」

「「そうね～」」

「なんだ？もう実況しないのか？」

ああ実況ね、実況は

「「「飽きた」」」

「あっそう・・・・」

「もしかして自分もやりたかったのかしら？」

「なんでそうなるだよ！？」

なんかこの会話にもマンネリを感じちまうなぁ。

この状況をぶっ壊す俺にしか出来ないような狂った方法はなんかねーかな。

・・・・・・・・・・・・そうだ、この案があったか！

「なぁ幻月」

「なんですか？」

「弾幕無しなら『遊び』してやってもいいぜ」

「それならお安い御用！さあさあはやくやりましょうよ！」

おお、自分でさっき提案しただけあってかなり乗り気だな。

「わたしはここで見てるから近くで殺らないでね～」

「ちょっと待て、幽月やめろ！自分が何しようとしてるか分かって

んのか！」

「何って楽しい楽しい殺し合いだぜ？勝ち目なんて物もわかったもんじゃねーのも重々承知してらぁ。だがな楽に殺すより殺るか殺られるかのギリギリの命のやり取りなんて燃えるじゃねーか」

「・・・・お前、狂ってるぞ」

「かはは、そうだなぁ。俺ぁ狂ってらぁ、そう完璧に壊れてる。だがそれでいいじゃねーか、世界にゃ常人がいる偉人もいる変人もいる・・・・・・・なら狂人がいたっていいじゃねぇか、そうだろ？」

「・・・・・」

「ねえねえまだなのかしら？待ちくたびれたんだけど」

っとお相手が退屈とあれば楽しませてやんなきゃなぁ。

「悪い悪い、待たせたな。そんじゃ、楽しもうぜぇ。命かながらのひった張ったのやり取りをよぉ！」

「うふふ甘く見ないでね、私達二人で一人前なんだからね」

・・・・・自慢になってねぇぞオイ

と言うことで夢幻世界タイトルマッチ第二戦がはじまった。

第十一狂　幽月と幻月（後書き）

ふぁい！

後半の幽月ですがいつものじゃなくてこっちのほうが本当は通常時だったりします。

夢幻世界では死とかはないんですが命はあると勝手に解釈してます。

簡単に言えば夢幻世界に居ればどんな人でも蓬莱人って感じです。

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十二歌　一対の狂人（前書き）

こんばんは・・・・・こんにちわかな？糖類です

今回はフルで戦闘回です！（といっても文才がアレなのでゴミみたいな出来ですがね）

書いてて思ったこと

・なんども幽月を幻月や夢月と書いてしまう

・なんども幻月を幽月や夢月とかいてしまう

・幽月、幻月、夢月で三月精ならず三月妖か三月狂っていうトリオ作ろうかな？と考えた

では、第十二狂です！どうぞ（＊、・∀・，＊）

第十二歌　一対の狂人

「楽しもうぜぇ。命かながらのひった張ったのやり取りをよぉ！」

「うふふ甘く見ないでね、私達二人で一人前なんだからね」

そう告げただけで合図などは特に無くどちらが先とも言わずに互いに殴りかかった。

「ちょいさぁ！」

「あははっ♪」

ドゴッ、ドスッ、バキッという鈍い音や聞いて嫌になるような音が互いに響く。

それから拳と拳、脚と脚が重なり合う。そして避ける、それを追う。それを避けてカウンターを放つ。

そのやり取りを続ける。

拳が顔に当たり吹っ飛ぶ、脚が体に当たり服ごと切れる。

互いに壊し壊されて快楽を得る。常人では考えられない精神構造の二人だから笑いながら、喜びながら『遊び』続ける。

「あはは♪どうしたの、攻撃が甘いわよ？」

「！？ぐぁっ・・・」

幻月の声がした後、幽月は顔を顰（しか）め、体を飛ばされる。どちらとも『人間』という物のあり方を超えた人型のモノ。並みの人

が食らったら一発で体が千切れるであろう攻撃をしては交わされ、されては交わす。しかし全部を全部避けることは出来ず何発に一回、掠れるだけで体が切れて血が出るような攻撃を食らう。それでも立ち上がり笑う。笑って相手を壊そうとする。ただそれだけのことを続ける。

「ククク・・・・かはははは・・・・・・・・・・・・ぎゃはははははははは！！！！おもしれぇな！おもしれぇぞぉ！」

幽月は顔は血で濡れ、瞳孔は開き、聞いたら誰もが不快な顔をするような笑い声を上げ幻月に襲い掛かる。

「ふふふ、うふふふふ、あはははは♪幽月すごいねぇ！今の攻撃食らって死なないのは夢月ぐらいなのに！じゃあこれだったら壊れるかしら？」

同じく幻月も顔には血が滴り、笑い声を上げて幽月を見据える。幽月はアッパーを、幻月は宙に上がりそこから急降下する。

ぐちゃっ、そんな音がした。幽月の腕は幻月の腹を貫通した。

「いた～い♪でもこんなんじゃ終わら無いわよ、きゃはは」

腹が開いてることなんて気にも留めずそのまま自分の手を幽月の左腕の付け根に近づける。

そして力任せに幽月の腕を引き千切った。

「おお、なんだなんだ？腕が取れちゃったじゃねーかよ。ひでーことしてくれるな、ぎゃはは。でもよぉ腕ってもんはよ、二本あんだ

ぜぇ！」

無事な右腕を幻月の腹部目掛けて振りかぶる。
それを避けようともせず幻月が受ける。

「あはは、すごーい！そんなになってもまだいけるのね！」

大してダメージは無く、余裕の表情で幽月を褒める。

「おいおい結構本気で殴ったのに全然食らってねーじゃんか。凹むぜぇ、俺メンタル弱えぇからよ。なんったってガラスのハートだからよ（なんか形勢を立て直す方法はねーのか？このまんまじゃやられっぱなしだからなぁ・・・・・・そういや俺の能力って能力を創る程度の能力だっけか？なら早速残虐な能力でもかんがえてみるかねぇ）」

そう考え幻月との距離をとり、能力をイメージする。

そして出来たのが「電気を司る程度の能力」

「おお？これで出来たのか。もうちっと凄いのがよかったんだがそれはまた今度ってことかね」

「あはは、何ぶつぶつ呟いてんのかしら？もう音を上げたなんてことはないわよねぇ！」

「かはは、そんなわけねーだろうが！ちょいとばかりこの『遊び』

にスパイスを加えようと思っただけだぜ」

そういって勘を頼りに手元に電気の塊を作る。最初は拳大ぐらいだったが圧縮し、ピンポン玉ばかりの大きさにし、

「そんじゃあ！能力のお試しタイムだぜぇ、かはははは」

幻月に向けて放った。

放たれた弾は幻月には当たらず目の前で盛大に爆ぜ、周囲を焼き尽くし何も無い空間を作り出した。

「ふふふ、ちょっとだけびっくりしたかしら？」

「威力は最高だなぁ、だがあんまり効かないってか」

依然、幻月は笑いながら立っていた。

「かはははは・・・・ぎゃはは！ならこいつをくらってみやがれえぇ！」

飛び上がり、幻月の周りに電流で出来た金網のような物を張り巡らせて出られないようにする。

「ぎゃはははは逝っちまいな！」

そして金網の中に高圧電流を流し込んだ、金網の中は電子レンジのように熱が篭り灼熱の地獄と化しながら幻月を感電させる。

「きゃあああああ！？」

「あっはっは！丸焦げになりやがれ！」
辺りに人が焼ける臭いがあがる。普通なら生理的に受け付けられないはずの臭いを幽月は最高と言わんばかりに嗅ぐ。

「これで終わりだああ！」
最高出力の電流をながし金網ごと爆散させる。
跡形も無くなっているであろう場所に目を向け口を三日月の形にさせる。

しかし

「フフ、ウフフフ♪アハハハハハ・・・・ドウシタノ？モット遊ビマショウヨ♪」
服はボロボロになり体のあちこちに火傷があるにも係わらず壊れた笑い声を上げる幻月がそこにいた。
しかも驚くことに傷がどんどん治っていく。
「かははは、お前はどこのターミネーターだよ。おもしれーなオイ。まぁいいぜ、俺はただ狂うだけだ」
そして互いに笑いながら最大限の力で殴りかかった。

＜幽月視線＞
ガンダムで出てきたアグザリッサとかアッザムのまねをしてからしばらく経った訳だが未だに俺らは『遊び』続けている。

畜生・・・・・もう限界スレスレだ。クソったれめ。

「はぁはぁ、なあ一つ言って良いか？」

「げほッ・・・なんですか？」

糞、こんなこと言うなんて恥だがもう・・・・・持たねぇ。

「うんこしたいんだけどトイレどこ？」

こうして俺と幻月の『遊び』は終了した。

「っておいいいいいいい！？なんだよこれ！戦闘のムードぶち壊す終わり方は！？」

「しょうがねーだろうが、もうそこまでベンジョンソンがきてたんだからよ」

「私としては満足したから構わないですわ」

「ほれみろどうだ、ぶーの音も出ねーだろ」

「うぐっ・・・・・でもこんな終わり方で読者の方々がゆるしてくれんのか？」

「「しらないそんなこと」」

「ちょっと、わたし最近空気じゃないのよ～」

どんまいカナ、負けるなカナ、きっとそのうちいいことあるさ。

第十二歌　一対の狂人（後書き）

はい、読了感謝です！
自分としてはもっとグロテスクな描写を思いついたんで書きたかったんですが運営さんにＢＡＮされちゃいそうなので今回は泣く泣く省きましたｏｒｚ

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十三幼　それ行け三月妖！～空の場合（前書き）

こんばんは糖類です、調子よかったので本日３つ目です。
え？出来はどうなんだって？
ＨＡＨＡＨＡＨＡ！面白いことを聞くねジョニー。そんなものゴミ同然に決まってるジャマイカ

それでは第十三幼です。どうぞぞぞぞー

第十三幼　それ行け三月妖！～空の場合

どうも、落雲空です。現在博麗神社にいるんです。幽月が戦い終わってた頃にはとっくに霊香が夢月をぼっこぼこにして神社を直させる事に。
さすが悪魔って感じですね、あっというまに博麗神社はリザレクションしました。
っえ？なんで幽月視線じゃないんだって？それはですね、実はｙ（ｒｙ

「うつぅー！あそぼー」

「ぐぼぇっ」

縁側に座っていた俺に対してそれはそれは可愛いらしい幼女・・・妖女がタックルをかまして来た。
上手いこと鳩尾に入ったので苦しんでいます・・・・・・かるく涙が出てきました。

「あははは！うつおもしろい！」

幼女はたぶん俺の状況が分かって無いんでしょうね苦しみ悶えている俺を指指しキャイキャイ笑っています。

「ねぇうつ！あそこでげんげつとむげつがへんないきもの見つけたんだよ！」

目をきらきらさせながら俺に舌っ足らずの口で訴えてきます。世のロリコンどもが見たら鼻血だして抱きつこうとするでしょうね。

「はぁ、変な生き物って巨大な化け物とかじゃないだろうな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・幽月」

そう、この幼女、何を隠そう我らが自由人であられる狂歌幽月なのです。

どうしてこうなったっかって言うと遡る事一時間ほど前。

「ほら、早く直しなさいよ」

「うぅ～強すぎるわ」

「うふふっ私って最強ね！」

どっかの？が言うはずの台詞を博麗の巫女さんが言うとは世も末である。

「ねぇどんな気持ちかしら？自分から喧嘩し掛けて負けて謝らなきゃいけなくなった気持ち？」

「なぁ幽月、カナの奴が相当荒んでるんだが」

「ほっといてやれ、この話でも多分これで出番終了だから」

この作品で一番最初に出てきた原作キャラだというのに無念すぎる。そうしている中に幻月が神社を直した。

「これで良いでしょ？じゃあ私達は帰るから、二度と来ないでね」

「まてやコラ、まだ帰って良いなんて一言も言って無いわよ。あと夢月と幽月も三人そこに並びなさい」

霊香が札を構えながら三人に命令したので、痛い目には合いたくないので三人とも文句を言わずにならんだ。

「あんたたちは幻想郷ではちょっと危険だわ、かといって封印するほど凶暴ってわけでもないわ。だから様子見の一環としてちょっと呪いをかけるけどいいわね？」

「おいおい、なにがいいわね？だよ。全然よくねーよ。大体なんだよ呪いって。しわくちゃのジジイにでもするつもりか？」

幽月が異議を唱えると幻月、夢月も「そうだそうだ！」と追加攻撃する。

「うるさい黙れ、文句あんなら言ってみやがれ。ただちに封印してやるから」

「OH！ミコサンボウリョクヨクナイデース！コレセカイノジョウシキ」

幽月は本能的に反抗したらまずいと悟り片言で反撃。

「・・・・・・あっラピュタが浮いてる！」

「「「マジでか！？」」」

「いまだ！でりゃあ！」

ＢＯＭ！！

靈香の根も葉もない嘘にまんまと引っかかる三月妖。その隙に靈香が特殊な札を投げ込む。札は見事に三月妖に当たりボンという音を立てた。

煙が晴れるとそこには若干さっきまでのおもかげを残した幼女が三人並んでいた。器用なことに幽月はショタではなくロリに性転換されていた。

「キターーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！これで我が神社はあと十年は戦える！」

なんと博麗の巫女はロリコンであった！おまけにさっきからこの時代には無いはずのネタまで使ってくる。なんとも最低な巫女である。汚いなさすが靈香汚い。

ってなことがあったんです。幽月の言うあそこことは神社裏にある池の方向。さっきはさっきで三月妖（いや今は三月幼か）の連中はどでかいゴリラみたいな妖怪をリンチしてましたからね。元が悪魔の姉妹と大妖怪を超える妖力所持する狂人だからしょうがないのかも

しれませんがね。

「わかった、行くから。頼むから引っ張らないでくれ。腕が千切れちゃうから」

「うー、はやくー」

「そのうーうー言うのを止めてくれ」

池に行ってみるとそこには幻月が片手で何か大きな物を振り回していました。その様子を夢月はそれをみてコロコロ笑っていた。・・・・・・なんか胃に穴が開きそうだ。

「・・・・なにやってんだよおまえら」

「きゃはは！おもしろーい！」

「あはははは！姉さん私にも貸してー！」

って聞いて無いし。元の姿なら常識人（殺しには躊躇ないけど）の夢月でさえも幼女化した今、とめに入ってくれない。

・・・もしかして幻月が持ってるアレって玄爺だったするんじゃないか？・・・・これを霊香が見たら大変のことになりそうでゾっとする。

「おっおいおまえら、それ何なんだ？」

「ん？何って喋る亀だよ？」

はい、玄爺さんですね分かります。玄爺、ご冥福をお祈りいたします。

「どっどなたか存じませんが助け・・・・うぎゃあああああ」

「「「あはははは」」」

「ごめんなさい助けられそうにありません」

俺は霊香やそこにいる三人組みたいに超人的パワーは無いので無理です。

「でりゃあああああ！」

幻月がハンマー投げの方法で玄爺を回し、俺の方に投げた。

って投げた！？

「「ぐえっ」」

俺の鳩尾に玄爺が入り、そのまま俺の意識は飛んでしまった。

第十三幼　それ行け三月妖！～空の場合（後書き）

うわあああああああああああああゆうげちゅかわいいぜえええええええ！
文字では表せないが頭の中にはちゃんとニコニコ笑っているゆうげちゅが浮かぶぜ！
この話の方が普通の話より何倍も書きやすかった驚愕の事実ｗｗｗ・・・・ダメだ俺は逝っている。

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十四編　それ行け三月妖！～霊香の場合（前書き）

ちわ～糖類です。
今回は霊香さん視線で参ります・・・・・・・カナは犠牲になったのだ。（ちゃんと夢幻世界から神社に帰ってきてるよ！置いてかれてたりして無いんだよ！）

というわけで第十四編です。どーぞー

第十四編　それ行け三月妖！～霊香の場合

こんにちは、かしら？結構な話数出てるというのに作者が一向に設定に加えようとしない酷い扱いを受けてる霊香よ。
っえ？なんで幽月視線が変わってるのかって？そんなの簡単よ。本当は幽月視線なんだろうけど私がかけた術で愛すべき存在になってるから無理だろうし。
ロリ万歳、何か文句あるかしら？世界には常人がいる偉人もいる変人もいる・・・・・・・ならロリコンがいたっていいんじゃないのかしら、そうでしょ？

「買い物に行くんだけど誰か一緒に行かないかしら？出来れば幼女希望よ・・・・・・・・・・・・・・ってなんで玄爺と空がぶっ飛んでるのよ」

「それはね～、げんげつが亀をうつに投げたからだよ～」

穢れを知らない子供はとても、それはとても親切に教えてくれました。元の姿じゃ絶対に素直に教えないだろうけどね。

「それは悪いことだって分かってんのかしら？」

小さい子を怒るのは私の意に反するけどこれは怒らなきゃならないことなのでしょうがなく怒っておく。

「！？ひぅ・・・・・ごめんなしゃぃ」

「可愛いから許すわ」

玄爺？そんなこと知った物じゃないわ。そりゃ可愛い幼女が半泣き＋上目遣いを使ってきたらもうどうでも良くなるでしょ常識的に考えて。

「それで、私と一緒に買い物行ってくれるのは誰かしら？」

「おれがいくー！」

なんと意外な事に幽月が自分から言って来てくれた。しかも私に抱きついてきた・・・・ヤバイわね、貧血起こしそうだわ。

「じゃあ夢月と幻月はお留守番で良いわね？」

「いいんだよ！」

「グリーンだよー！」

なぜそれを知っているし。私は知っているんだけれども。

「そう。じゃあ頼むわね、遊んでて良いけど殺したりしたら駄目よ」

「「は～い！」」

素直ねぇ。もうこのまま永遠に幼女のままにしてもいい気がしてきたわ。

という事で場所が変わって人里に到着。移動は私が幽月をおんぶして飛んだのだけどその際の血痕が神社から人里まで一直線に？がっている。そりゃ後ろで一生懸命話しかけてくる幼女がいるならば鼻血の一つや二つ、盛大に吹き出るでしょうが。

「わぁ～人が一杯だ！全部ぶっ壊したいなぁ」

「そうね、はぐれると困るから手繋ぎましょうね。あと、暴力をするのならお賽銭をくれない奴とめんどくさい妖怪だけになさい」

「わかったぁ！」

ハァ、やっぱ幼女は可愛い。可愛すぎる。・・・・・・襲っていいわよね！？襲って良いのよね！？こんなに可愛いから襲われちゃうのよね！？可愛い方が罪なのよね！？襲った暁にはまず手始めに【以下自主規制】

「こら、真昼間の道で堂々と変態じみたこと考えるんじゃない」

くそっまた面倒な奴がきたわね。いいじゃない別に妄想ぐらいしたって。どうせあんなことやこんなこと出来るわけ無いんだから。仮に出来たとしてもにじファンじゃ無理だろうし・・・・・・・

「妄想ぐらい好き勝手してもいいじゃん」

「否定はしないんだな」

する必要なんて無いわよ。否定してお腹膨れるわけ？お賽銭増えるわけ？幼女とイチャイチャできるわけ？

「あっけーねだ！」

「うわっ・・・とと。えっと誰だ？一度会った奴は忘れないようにしているんだが」

「わすれるなんてひどいぞけーね！おれたちのなかじゃないか～」

『おれたちのなか』・・・だと？まっまさか慧音の奴私にはこう言っておきながら自分は幽月と楽しいことしたのか！？

「ゆっ許さん！ゆるさんぞけーね！自分だけ良い子ちゃんぶりやがって。この世の幼女は私が守る！いや全ての幼女は私のものだあああああ！」

「言ってること無茶苦茶だぞ。それでお前の名前は何だ？聞いたら思い出すかもしれん」

「あっはっはー誰でしょう？」

「無視すんじゃないわよ。あと幽月、それ当たったら賞品とかあったりするのかしら？選択自由ならあんたを所望するわ」

「ざんねーん！聞く前に言っちゃったから商品はなし！あはははは」

畜生、畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生。じゃあなんだ？聞く前に答えてなかったら私の願望・欲望・煩悩を叶えてくれたとでも言うのか！？・・・・・ああ、ベーダ・・・・俺は・

・・・私は・・・・・orz

「ちょっと待て！お前、幽月なのか！？」

「そうだよ～」

「・・・・・すまない、私は疲れてるようだ。私が知ってる幽月は里の子供を助けた変わった男の妖怪のはずなんだが」

「ふふふ、あっはっはっはっは！よくぞそのことを言ったなけーね！それはだなぁ、この偉大なる博麗の巫女であられる私が監視という名目で幼女にしたのだ！」

「・・・だから神社の参拝客が少ないんだぞ」

五月蝿い黙れ。

「というか幽月、あんたいつの間にそんなことしてたのよ？」

「ん～？霊香にきょーせーかんきんされた日におさんぽしてたらなりゆきで？」

「いや私に聞かないでよ」

「強制監禁って霊香お前・・・・・」

ぐっぐわあああああああ、その目を止めろぉ！そんな冷たい目で私をみるなぁ！

「・・・・やはり幻想郷児童ポルノ保護四天王の一角上白沢慧音。

侮れぬ」

「何だそれは、勝手に人を変な四天王に入れてくれるな」

「だが断る」

「じゃあそれを断る」

「なん・・・だと？って、幽月は？」

「えっ？さっきまでそこに居た筈・・・」

「「あれ？」」

この後、私とけーね・妹紅を巻き込んで幽月捕獲作戦が開始された。

第十四編　それ行け三月妖！～霊香の場合（後書き）

はい、露骨に変態度が増した霊香さんでした。
幽月はどこに行ったのでしょうか？ヒントは作者の嫁です（緑髪の方です）
もうバレバレでしょうが言うなよ！？絶対に言うなよ！？

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十五変　それ行け三月妖！～霊香の場合せかんどし～ＺＵＮ（前書き）

こんばんは、今日二話分投稿するとか抜かしてた糖類です。
絶対に書けません。胃に穴があきまくって蜂の巣みたいになってると思う。

えっと、本編の前に東方旧作と独自設定を書いとこうかと。
もっと詳しくって場合は遠慮なくおっしゃってくださいな。一話分としてつくりますよ。

1．夢幻世界について
簡単に言えば幻月と夢月が住んでる世界。二人で作った。二人の家以外は戦闘のあとなどで荒れてる。

2．夢幻館について
これは何個か説があります。普通は紅魔館はスカーレット姉妹が住むから紅魔と呼ぶというのと同じ理由で夢幻館は幻月・夢月が住んでた館（それを幽香が乗っ取り二人を封印。東方幻想郷の時に幽香が霊夢・魔理沙に負け封印が解かれた）という説がありますが、今作ではただ単に夢幻世界の狭間にあるから夢幻館でもとから幽香およびエリー・くるみが住んでた（オレンジは野生の野良妖怪と考える）って説にしました。
理由はキャラ同士いがみ合うものはあまり書きたく無いので↑甘ちゃんですね

3．幽月の館について
まだ第三願、第四会、第五行にしか出てなくおそらく皆様から忘れられてるであろう幽月の家。絶賛名称募集中だったりする（自分で決めろカスと思うかもしれませんが私のネーミングセンスは逝かれ

てるのです）
この館は夢幻館と立地が似ていて屋久間（館と同じく忘れられてるだろう幽月を転生させた神）の住む世界の狭間に建っている。常人で入り口が見つかるわけ無いのだが例外（霊夢とか）は勘などですんなり入れる。

4．屋久間祷霊について
絶対に忘れられてる神。一応登場は考えられてる（幻想郷の神々が集まる水無月あたりで多分秋姉妹だとか神綺様と一緒に出すつもり。ただし今は葉月のためあと2ヶ月先）
能力はただ世界を創りそれを見続けるのを義務付けされてる感じなもので別段、チートというわけで無い。

5．屋久間の住む世界について
これも名称募集中世界。夢幻世界とはうって代わって綺麗に掃除？された何も無い真っ白な世界。ここは霊夢などでも入れず屋久間と屋久間のお友達（神々とか幽月とか霊香とか）だけしか入れない仕組み。

って感じです。魔界とかだすときにはまたこういった説明をかこうかなと。
動機は旧作持ってる方は相当限られてるので持ってない方でもすこしでも楽しめるようにと考えたので。

第十五変　それ行け三月妖！～霊香の場合せかんどし～ＺＵＮ

「良いわね？草の根を掻き分けてでも幽月を探し出すのよ！」

「いや良くない良くない。第一私はその幽月って子と会ったことなんか無いのにどうやって探せばいいのよ」

「大丈夫よもっこす。幽月は髪が紫のロリっ子でとてつもなくかわいいから一目で分かるわ」

「もっこす言うな。その説明じゃ全然分からないわよ・・・」

「それにもとはといえばお前が目を話したのがいけなんだろうが、自業自得だぞ」

「うっ・・・でもけーねが私につっかっかって来たのが悪いんじゃない！」

「それはお前が先だ」

馬鹿な・・・じゃあどうすれば探してくれるのよ。あっそうだ、この手を使うか２８２８。

「ちょいと慧音さんこちらに入らしてくださいな」

「なんだいきなり畏まって気持ち悪い」

気持ち悪いって・・・おまっ気持ち悪いってそれは酷いわよ。まあそれは置いといてとりあえずもっこすから見えないような場所にけ

ーねをつれていかなきゃ商談が始まらないわね。

「うわっと、なんだいきなり引っ張ったりして」

「ふっふっふ、そんなことより慧音さんこれを差し上げましょう」

「こっこれは！？」

「ご満足頂けたでしょうか？幽月を探し出してくださいましたらさらに上乗せいたしますよ」

「わっ分かった、妹紅には私が説得しておこう」

クククッ・・・・はっはっは・・・あはははは、ちょろい！ちょろいぞけーね！正に計画通り（ニヤッ

どんな物をけーねにあげたかは想像にお任せするわ。

こんな感じで幽月捕獲作戦は幕を開けた。

【すて～じ壱　哀れな少女】

人里から所変わって博麗神社近くの湖のあたり。幽月捜索からはや十二刻あまり経った。日中から探し始め時刻は？時（ほじ）。長時間に亘る労働により慧音と妹紅は疲れ果てていた。しかし霊香は依然として生き生き・・・というよりか血眼で幽月を一心不乱に探し続けている。

「どこだ!?どこにいるんだ!?」

泣く子も黙るどころかより一層激しく泣いてしまうぐらいの形相で探す霊香。

「はぁはぁ、これだけ探してもいなんだったらこれ以上やっても無駄じゃないの?それにその幽月ってのも一応妖怪なんだろ?何もそこまで必死にならんでも・・・・」

「それもそうだがいなくなっていることを知っておきながらそれを放置するのは気が引けるな（クソッ早く見つけなければ、何としてでも霊香からブツを貰わなくてはならないというのに）」

妹紅は単に疲れ、慧音は妹紅と同意見と見せかけ霊香までとはいかないが幽月を探し続ける。このやり取りが延々と続くと思われたが弾指（たんじ）、三人目目掛けて弾幕が撃たれた。

「「「!?」」」

仮にも幻想郷で上位の強者である三人が奇襲ぐらいでダメージを受けるはずも無く驚きつつもヒョイヒョイとかわし弾の撃たれた方向を見据える。

「ええ!?なんで避けれるのよ～」

現れたのは金髪のロングに背中に大きなコウモリの羽を生やしたいかにも「私、吸血鬼です」といってるような少女だった。

「なっ!?金髪ロングのロリ・・・・だと。クッこれは許すしかないわね」

「「何故そうなるし」」

「あっはじめまして。私はくるみ。この湖の番人なの。ここに来た邪魔者を一人残らず倒してるの」

「そうだったのか、私は上白沢慧音だ。隣が藤原妹紅、そこのアレな世界にトリップしてる変態は博麗霊香だ」

「いや慧音も何自己紹介してんだよ！こいつは私達に攻撃してきたんだぞ」

「それは命令上しかたなくやったのよ、それに今日はいつも以上に警備を固めろって言われてるし」

「ん？何かにおうわね。私の勘がそう告げてるわ。くるみ・・・だったかしらちょっと脱ぎなさい」

霊香はいわゆる針巫女装備といわれる物でくるみを威す。どう見ても〇姦ですね本当にありがとうございました。

「だめだこいつ、はやく何とかしないと」

「妹紅、こいつはもう手遅れだ。諦めよう」

「ちょっ助けてくれないの！？・・・きゃうっ」

「グヘヘお嬢ちゃん私と一緒にイイコトしようよ」

もう笑い方からして完璧に変態と化した霊香。青いつなぎを着た男

とためをはれるぐらいだろう。

「やめっ助け・・・・・アッーーーーーーーー♂」

「「くるみは犠牲になったのだ」」

「うぇーん、汚されたぁ！」

「げひゃひゃ、この流れで三月妖をヤるわよ！」

「なぁ慧音、こいつ放っておいたらいずれ大変なことがおこりそうで怖いんだが」

「・・・・そのときは・・・・・・諦めよう」

「諦めんなよ！昔の自分を思い出せよ！君はピュワだったじゃねーか！」

「何故修造になったのよ。後、妹紅あんたまだ気付いて無いようね」

「気付くってなんだよ」

すると霊香は口を三日月の形にし、気やけ顔で

「私は博麗の巫女よ、分かるかしら？つまり私を排除しよう者がいるならそいつは幻想郷を潰そうとしてると言っても過言じゃないわけ、後は分かるわね」

「・・・なんか父親が警察とかのお偉いさんでそれを盾に悪事をはたらく不良みたいだな」

「さて、くるみ。あんたの主人のとこまで案内しなさい。言うことを聞かないときは・・・・・」

「分かった！連れて行くから！もうやめてぇ」

【すて～じ壱　くりあ？】

第十五変　それ行け三月妖！～霊香の場合せかんどし～ＺＵＮ（後書き）

はい、読了どうもです。
霊香は絶対に止まりません。走り出したら止まらないロケットなんです。

なぜ昔の時間の単位を使ったのかというと幻想郷ってそんな感じじゃね？と思ったからです。
１刻はいろいろとありますが３０分計算です（私が混乱するため４０分計算の方は使いません）。日中は１１時～１３時、？時は１５時～１７時・・・・だったはず、全部うる覚えなのでもしかしたら（いや絶対）間違ってるかもしれないので間違ってたら教えてください。

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

・・・・・・なんか今回私、異様に真面目だな

第十六辺　それ行け三月妖！～もう一種の異変と化した霊香の場合（前書き）

こんばんわ？ですかね糖類です。
なんか最近霊香押しになってますねw
オリキャラのなかでは空が一番好きなんですけど
理由はアレです、俺っ娘（二次元に限る）は最強だと思うんですよ。
それだけです。
霊香のあとには神社に残ってる人たちとその他でカナの場合をやります。
やったねカナちゃん！出番ができたよ！

それでは第十六辺です。どーぞー

第十六辺　それ行け三月妖！～もう一種の異変と化した霊香の場合

【ステージ弐　夢幻の門番】
くるみをレ〇プした霊香はそのままくるみに主の元へと道案内を強制させた。
しばらく移動するとそれまで日が半分溶けた橙色の湖の風景からほぼ黒一色で塗り固められた荒れ果てた世界へと変わっていった。
「なんで夢幻世界に来てんのよ。これで本当にあってるのかしら？もし間違ってたなんて言ってみなさい、そん時は・・・・ケッケッケ」
「ひぃ！？あってる、あってるからぁ！」
「なぁ慧音、あれが鬼巫女か？」
「そうだな」
「なぁ慧音、私達前話後編から空気になってるな」
「・・・・そうだな」
一応妹紅は修造、慧音はくるみと自己紹介をしている。一応。
そんな駄弁りをしばらく続けても目的地らしき物は全く見えず景色も全然変わらないので、ただその場で足踏みをしてるかのような感覚にも陥りそうになる。
「だあああ！いつまでこの何にも無い面白みも無いトコを歩かせる

つもりよ！」

我らが鬼畜巫女は一刻も早く幽月に会いたい、といっても会うだけで他の変な事をしないか不明だがモタモタするのは嫌なのだろう。

「もうすぐ着くからガマンして！」

「もうすぐってどれくらいよ、５分？１０分？３０分？」

「喧しいわ！もう少し黙って歩けよ！私達は特に関係も無いのに無理やり連れて来られたんだぞ、こっちのことも考えろよ」

「酷い話ね、そんなこと誰がしたのかしら？」

「お前だ霊香。それに妹紅もあんまりツンケンするな、可愛い顔が台無しだぞ？」

「なっ！？可愛いって・・・・その私は・・・・その（ゴニョゴニョ」

「もこたんかわいいよもこたん、ハァハァ」

慧音まで常識人から変態へとジョブチェンジをしてしまった様だ。もうこの一行はカオス以外の何者でもないだろう。

「うわ！？頭から角が生えた！」

「いいかしらくるみ？悪い子はあの角で掘られちゃうのよ」

「エッ！？なにそれこわい」

そんなこと真っ赤な嘘である。

「あら、あれは何かしら？」

そういって靈香は指をさす。その方向には立派な館と青いタイルのようなものと空？に青い星がチラチラ浮いていてその周りを大きな門が囲っている異様な光景であった。

「あれが私の主人が住んでる館よ。もういいでしょ？私は湖に帰るから」

「そう、なら帰りがけまた立ち寄ってあげるわよ。喜びなさい」

その言葉を聞くとくるみは大きく肩をビクつかせ「絶対こないで～！」と言い捨て逃げていった。

門の前まで一向が歩いて行くとそこには一人の少女が立っていた。逆刃の大鎌を持ったカールのかかった金髪に麦藁帽？をかぶったあまりにも不自然な少女が。

「そこのあなた、ここは何かしら？」

「ここは夢幻世界と現実世界の境界にある館です。私はここを見張っているエリーです」

「で、何？」

「はい？」

説明をしたのにそれをさらに質問されることが分からなかったので
あろうエリーは首を傾げた。
「どうせここを通りたくば私を倒せって言いたんでしょ？いいわ、
潰してあげる」
「待て待て、なんでそうなる。もう少し穏便にいこうとは思わない
のか？」
「全然思わないわ」
と、とても清々しい笑みを霊香は浮かべる。
「いい笑顔で言われても困るんだが・・・・君はどうなんだ？」
「私のいいたいことは大体、そちらのモノトーンカラーの巫女さん
が言ってしまいましたよ」
「ほーれみろ、ざまーみろけーね！」
「なあ、一回殴っても構わないか？ものすごくこのドヤ顔を殴りた
いんだが」
「落ち着け慧音、お前まで荒れたら収拾つかなくなるわ」
「そうよけーね、暴力はいけないわ」
「「お前が言うな」」

もっともである。

「・・・あなた達は何をしに来たんですか。それにしても今日は凄い日ね。普段は全然誰も来ないような場所なのにあなた達合わせて４人目ですよ。今日だけで」

「えっ！？誰かしら？」

「紫の髪が印象的な可愛くて小さな女の子でしたよ」

「なん・・・だと」

あっさり幽月の居場所が発覚し、霊香は驚きの声をあげる。

「よかったじゃねーか、みつかってよ」

「あれ？その子ってあなた達のお友達か何かだったりするんですか？」

「ええ、私のよｍ（ｒｙ」

「言わさん！」

霊香が妄想を暴露しようとするも慧音により遮られる。

「あらら、そうでしたか。しかし返すわけにはいきませんよ」

「なあああああああああぜえええええええええええだあああああああ！」

まさかまさかの幽月を返さないと言われた事により怒りなどの感情が剥き出しになる霊香。

「うちの主人がそう仰ってたので」

「いいわ、あんたもその主人ってのも血祭りにあげてやるわ！」

「怖っ！でっでも負けるわけにはいかないんです！」

「これでもっ食らえ！」

エリーは自分の足元のタイルをはがしては霊香に向かって投げ、弾幕をばら撒く。時折、ブーメランのように大鎌を投げては手元に戻したりする。

「そんなの食らうわけ無いでしょうが！」

霊香はスイスイと弾を避けていき、隙があれば大量の札を投げる。

「クッそうですか・・・・なら、これで！」

このままでは倒せないと悟ったエリーはタイル剥がしなどをやめ、自分を軸に輪を作る様な形で弾幕を貼る。又、この弾幕はいわゆる米粒弾幕なので避ける隙間が狭く速度も速い。

「まだまだ！こんなもんじゃ私は倒せないわよ！」

流石博麗の巫女というべきか幽かな隙間を見つけてはすばやく飛び

込み弾を避ける。

「そうですかねぇ？」

突如、弾幕の種類を変える。反時計回りに短い光線のような弾を撃ち、霊香に向かって再度鎌を投げる。

「うわっ！？・・・・・なんのこれしき！」

一回被弾したものの余裕の表情を浮かべる。

「こっこれもダメだなんて・・・・・なら、本気でやりますよ！」

そういうと一旦攻撃をとめ霊香の位置を確かめる。そして、通常・米粒・自機狙い・針型など多種多様の弾を乱れ撃つ。そして弾の種類を変えるときと一番弾幕が薄いときに霊香に向かって鎌を投げる。

「これは・・・ちょっと厄介ね」

霊香は持ち前の鋭い勘などで的確に避けていき、自身もエリーに対して弾を撃つ。

「目の前が・・・お留守ですよ！」

エリーは数少ない霊香の隙をみつけとどめと言わんばかりに全力で鎌を投げる。

「！？しょうがないわね、夢想六徳（むそうりっとく）！」

霊香はそういって自分の周りに六つの大きめな色鮮やかな光弾をつくりエリーに放つ。

「そんな大弾に当たる訳・・・・えっ・・・きゃあ！」

避けたつもりだが誘導弾幕なのでエリーを追いかけ、当たり、拘束し、爆ぜた。

「ふっふっふ、私にかなう訳ないでしょ」

「うぅ～幽香様ごめんなさい」

【ステージ弐　クリア】

「なぁ慧音、私達って連れて来られた意味ってあるのか？」

「一応私はあるな」

「なぁ慧音、今回私達のセリフって私の『なぁ、慧音』ってはじまる物が大半だな」

「空気以外の何者でもないな」

第十六辺　それ行け三月妖！～もう一種の異変と化した霊香の場合（後書き）

今回なんと！インチキ戦闘がありましたね。
そこでついやってしまった霊香のオリジナル技についてちょっと説明しますね。

夢想六徳：むそうりっとく
夢想封印と違う点は弾の大きさと着弾後に拘束および爆発する点ぐらいです。
弾の大きさは夢想封印の１．５倍ぐらいです。結構大きいですね。
緋想天だとか非想天則だとコストは４ぐらいですかね。
結構大きなダメージになるかと。着弾時＋爆発時の二回を６発一気ににに行いますので。

ちなみに六徳とは「人の守るべき六種の徳目」という意味です。

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十七篇　それ行け三月妖！～霊香さんがいく場合（前書き）

こんばんは糖類です。

今回ラストの部分ちょっとグロイかもです。でもあんまり詳しい表現はしてないので本当にそういう系が無理な人だけ閲覧注意です。

そんでは第十七篇です。どうじょー

第十七篇　それ行け三月妖！～霊香さんがいく場合

【第ボス無し参面　夢幻捜索２４時】
夢幻館の門番であるエリーをＷｉｎ版東方でいうスペルカードによって倒した霊香と楽しい仲間達は侵入者の癖に堂々と駄弁りながら最深部に向けて進軍している。
館の中は外と打って変わって清潔で掃除が行き届いている。

「なんかここまで対照的だと気味が悪いわ」

「それに門番がいるのに中は警備が一人もいないのはおかしいな」

「そんだけ夢幻館（ここ）の主人ってのが狂ってるんでしょ？幼女誘拐とか私の特権なのに・・・」

「「絶対に違う」」

「そんなわけが・・・・・・無い！絶対にあるものか！この世の幼女は私のもの、私のものは幼女です。そして私は全ての幼女を守り、愛し、愛で、襲い、喰い、えっちぃことをし、結婚する権利、いや義務があるはずだ！」

もはやジャイアニズムを超越した変人類とかした博麗の巫女。こんなのが幻想郷を管理していいものなのだろうか？

「何故言い換えたし、しかも義務ってお前最低だぞ」

「しかもちょっとかっこよく言おうとしてるところが痛いよね」

ご尤もな話である。

「・・・・・謝るから、痛いとか言わないで。生きるだけ損とは言わないで」

「別に何もそこまで言って無いよ」

「一応自覚してるのが唯の救いかもな」

「なんか最近周りの人からの扱いが酷くなってきた気がするわ。・・・・・ハッ！？まさかこれは私を博麗の巫女の座から引きずり落とそうとする闇の使者からの攻撃なのか！？」

「うわぁ・・・・今度は厨二病かよ。もう手遅れかも」

「闇の使者ってなんなんだ？第一お前なんかを倒して何の意味があるんだ？」

思いっきり引く妹紅と博麗の巫女（仮）に対しまるで倒しても何の意味もなく、むしろ損しかないというような慧音。

「おいコラ、私を倒したら幻想郷の危機よ・・・・多分。あと博麗の巫女（仮）って何よ！？せめて博麗の巫女（くず）ぐらいで勘弁しなさいよ！」

「屑って自分で言うなよ、自虐は良くないぞ」

「自虐じゃないわよ。ってアレ、何かしら？」

霊香が指さした物に近づいてみるとそこには何かのスイッチみたい

なものとその隣に「押すな、絶対押すな」と芸人の腕を試すような言葉が書かれた紙が添えられていた。

「明らかに何かあるだろ、これ」

「押したら大きな岩が転がってきそうなスイッチね」

「これは罠だ！私を博麗の巫女の座から落とそうとするための罠だ！」

と言いつつちゃっかりスイッチを作動させ、コロンビアポーズをする靈香。

「おまっ何押してんだよ！これでやばいことになったらどうするつもりだよ！？」

「いや、案外これで秘密の扉とかが開いたりするかもしれん」

すると、ゴゴゴゴ・・・と地鳴りがおきてなにも無かった壁が二つに割れ、中から下へと下る階段が出現した。

「ほれ見ろ、やはり私の勘は冴えてるわね」

「言ってる事が矛盾してるわよ」

「とりあえず入ってみるか？危険そうだが、ひょっとしたらひょっとするかも知れないしな」

3人が階段にいざ踏み入れようとした刹那、階段の下の空間と思わしき空間からとてつもない轟音が響いた。そして爆煙らしきものが

何時ばかりか遅れてから階段を伝ってきた。

「なっ！？何が起こってるんだ」

「私ら以外の何者かがここの主人とドンパチ繰り広げてる、と考えるのが無難ね」

「ドンパチってなんでだよ、そいつもお前と同じ理由とでもいうつもり？」

「いや、エリーも私ら以外は幽月しか来てないって言ってたし。かといって最近は殆ど誰も来て無いような言い方だったしそれは無いんじゃないかしら？」

「こういうときになると切り替えがはやいんだな、お前って。それはどうあれ一応行ってみる方が無難じゃないか？」

「それもそうね、じゃあ警戒しつつ慎重に行くわよ」

「だあああああああああ！いつまで続くのよこの階段は！」

わめく霊香。それもそのはず、辛抱弱い霊香に対しこの階段は長すぎた。かれこれ5分は下り続けるも一向に終わりが見えない。まるで延々と続く螺旋階段の様である。

「警戒しつつ慎重にってさっきのお前の言葉を忘れたのか？」

「五月蝿いわね、いいのよ私は。強いし、相手が勝つことはまず私の八百長試合と同然であり得ないんだから」

ぶっちゃけてしまえば実際のところそうである。

「というかさっきのお前の奇声で感付かれてたりでもしたらどうするのよ」

「そんときはそんときよ。というか私のロリ分が不足している・・・・早く幼女を見つけて襲わなければ死んでしまう！」

「もうお前は死んでもいいと思うぞ。死んでも『まだ未練がある』とかいって生き返りそうだし。第一お前って何でそこまで腐ってるんだ？つい前まではまだましだったのに」

「そうね、まだ言ってなかったわね。あれはある日のこと。私はいつも通り妖怪退治をしてたのよ。そしたらね偶然にも幼女が襲われてたのよ。それを助けたら目に涙残しつつも笑って『ありがとう』って言われたのよ。そしたら」

「そしたら？」

「なぜか知らないけど新しい世界に踏み入れたっていうか。なんと

いうかときめいちゃったのよ。それで友だちの神にそのことはなしたら『おお、同士よ』って言われて一緒に幼女盗撮とかやったりしたのがきっかけよ」

途中までまあまあベタないい話だったのにどうしてそうなった？しかも巫女が神と友だちなんて普通ありえないようなことをしている。

「神と一緒に盗撮しに行くだなんて、その神って邪神でしょ絶対」

「よく知らないけど凄い神らしいのよ。ってようやく階段が終わるわね。この階段をまた上るって考えるとうんざりするわ」

「それはお前だけだろう」

「なに・・・・・・これ・・・・・・？」

階段を下り終わったところは真っ赤な広い部屋であった。真っ赤と言うのもペンキではなく血。鮮血のように赤い色もあればどす黒い

色をした紅い華が部屋中の壁や天井、床に家具とありとあらゆる場所に大量に飛び散っており臭いも強烈で吐き気を催すぐらいである。又、血だけではなく人の身体の一部と思われる部分、手や足が無造作に落ちていたり白い骨、直視できないような臓器をメッタ斬りにしたものまで散乱している地獄絵図の世界に緑髪のチェック柄の服を着た少女となぜか元の姿に戻っている幽月が2人、笑って立っていた。

第十七篇　それ行け三月妖！～霊香さんがいく場合（後書き）

はい、いきなりですが次の話は「第十二歌　一対の狂人」と比にならないようなグロッちい文にしようかと考えてます。ゆうかりんって狂人キャラじゃないのになぜ幻月より狂人になるんだ？言われそうなんで先に書いときます。

両方ともバトルジャンキーなんで。それだけです。

ＢＡＮされるまえに忠告みたいなものが来るんでしょうか？一発問答無用のＢＡＮだったらお陀仏になりそうですｗｗ

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十八幽　それ逝け三月妖？～What kind of blood is

ちわっす糖類です。
今回はまあグロイです。其処まではないですけども。
前話で抜かしてたことは忘れてください。そこまでグロくはない・・・はず？

それ行け三月妖シリーズとの温度差が絶対零度の氷の世界から灼熱の太陽並にありますのでご注意を。

あと、１５０００ＰＶ＆２０００ユニークありがとうございます！
正直、一番最近に見たときの２倍あったので目を疑いました。まだ１５００ユニーク位だと思ってたのに・・・・
活動報告に書きましたとおりなんかします。二つ何かをします。
一つは決まってますがもう一つは皆様からのリクエストにいたします。
どんな方でも奮って参加してくださいね？

あと新連載もどき（没確定）を執筆中に思いつきました。あとがきの方に名前だけ書いときますよ～

長くなりましたが第十八幽です。どぅおうぞー

第十八幽　それ逝け三月妖？～What kind of blood is

【最肆幕　我が世界（きおく）は狂気とともに、破壊とともに】

見渡す限りの赤、紅の色をした咲き立ての華。そして散乱する人の「破片」。気が吹っ飛ぶぐらいの強烈な汚臭。

生理的に拒絶するような世界に笑いながらいる2つの人。靈香たちは探していた人物がいま、すぐ其処にいるにも拘わらず何の言葉も出なかった。否、出せなかった。ただ呆然とし、この場に佇むしか出来なかった。

「ねえ、次はどいつを虐めようかしら？」

「そうだなぁ、コイツなんてどうだ？体格もいいし『壊れ』難そうだしよ」

2人の近くには何かが動いていた。10数名ぐらいの人間。皆、手足を縛られ口は布のような物で封じられている。その中の男を幽月が勧める。男は肩を大きくビクつかせ、元から青かった顔がより一層青さを増し絶望の色へと変える。

「そうね、じゃあそうしましょうか」

そう少女が返事すると幽月は男をつかみ自分と少女の間に行くように投げる。

「ルールは分かってるわね？こいつらを死なないようにに痛めつける。面白い形にした方が勝ちよ？」

「なんでそんなめんどくさい殺り方なんだ？もっと派手に虐殺しな

んだよ？退屈でしゃーないったらありゃしない」

「だってこっちの方が殺され待ちのやつらだってより恐怖のどん底に落ちるじゃない。嗚呼、自分はどうやって殺されてしまうんだろうって感じに。それに殺られてるやつだって苦しみもがいて生きることは辛く、かといって死ぬことも許されない地獄って感じるでしょ？」

「おk把握。最高だなぁそれ。さっきのはお前が壊したから俺の番だな。うっし次はどんな手で虐めてやろうか、かはは」

そういうとニヤケ顔で男のほうへ近づく。

「お前も哀れだなぁ。綺麗な花が咲いていた花園を見つけて、そこの花を摘み取って売ろうとしてたら偶然にも幽香に見つかっちまうなんてよ。まあ情なんてかけないけど」

そして着物から何時かの鍔の無い脇差を片手で取り出す。そのまま刃を全て抜かずに鯉口あたりまででとめる。

もう一方の片手で男の手首をつかみ刃にギリギリ当たるか当たらないかぐらいの場所にもって行き

「一本と一粒、どっちがいいか？って喋れねーんだったな、ぎゃはははは」

右手の第一関節だけを切断した。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！？」

男は一瞬何が起こったのがわからなかったが自身の指の一部が目の

前を横切り鮮血が顔に付いたことで斬られたと分かり、一拍遅れて激痛が走った。

「ふた～つ、みーっつ、よーっつ、いつーつ。ぎゃはははは、次は第二関節か？それとも手首の根元からいくかぁ？」

シュッシュッという軽い音と共に指の破片が血の尾をつけ飛び、床に落ちる。

「もっもう許してくれ！頼むから！謝るから！もう絶対にしないって誓う、誓うから」

男の口を塞いでた布が外れたらしくここぞとばかりに救いを求める。

「俺に言われても困るんだよなぁ。お前達を処刑しようって決めたのは幽香だし、あいつには元の姿に戻してもらったっつー借りがあるし。第一俺も楽しいしな、ぎゃはははは」

そういい今度は男をうつ伏せにし、耳から耳まで一気に引き裂いた。

「うあああああああぁぁぁぁぁぁぁアアアアア・・・・」

「おっ？まだ生きてるな。さすが俺が見込んだ奴だぜ。ギャヒヒ」

今度は仰向けにして腹を開いた。そして腸を見つけるとそれを力ずくで引っ張り出し男の肩に乗せた。

「うあ・・・・あぁ・・・・・あ・・・」

「生きてはいるけど、生きた感覚はなくなってしまったみたいね」

「んだよ興醒めだな。しゃーねーからこうすっかね」

悲鳴、というよりかは断末魔の叫びのような物がもう聴けないことに少々残念がる幽月。
そして仕上げとして心臓を一度、一刺ししてから手で千切り取り男の口に突っ込んだ。

「ギャハハハハ、口から臓器が出るって漫画であったからやってみたがこりゃ傑作だな！」

「幽月あなた、解剖学でも学んでたりするのかしら？手馴れた鮮やかな解剖だったんだけど」

「ああこれか？そりゃ何人も何十人も何百人も殺せば嫌でも臓器の位置ぐらい解るぜ、キヒヒ」

「それに殺しちゃいけないルールだったでしょう、これで何人目よ」

「といいつつもお前も十分殺してんだからおあいこでいいだろ。それにこれは楽しいけどよマンネリ過ぎるぜ。いいかげん刺激が欲しいんだが」

「そうねぇ、じゃあこういうのはどうかしら？こいつらはとりあえず置いといて私達で殺り合って勝った方が。弱いものいじめの楽しいけれどやっぱり強い奴を倒す方が良いのよね」

「そんじゃ殺るかぃ？命かながらの殺り取りをよ！」

戦いの火蓋が落とされた。

＜幽月視線＞
よお、久しぶりの俺ことゆうげっさんの視線での物語りだ。今の気持ちを某伝説のヘビ戦士で風でいうと「またせたな！」だ。
んなことより久々に楽しい楽しい虐殺をしたぜ。圧倒的な力に対して何も出来ないでただされるがまま、良い眺めなこった。
後ぶっちゃけたとこ、まさかかの有名なＵＳＣに霊香の呪いを解いてもらうとは思いもしなかったな。
そんときのことは後で話そうと思う。というか今そんな暇は無い。

「ほらほらどうしたのかしら？もっとガンガン攻めてきなさいよ！こないなら・・・・私からいくわよ！」

そういって持ってた傘を俺に向けるとチャージ的な何かをして極太のビームを放ってきた。
これが元祖マスタースパークねぇ。殺傷力満点であたったら原子の霧になりそうだな。

「よっと、これでもガンガン攻めてるっつーの！」

とりあえず幻月戦でつくった電気を司る程度の能力で反撃するもヒョイヒョイ避けられるだけで終わる。

「ふふふ嘘をおっしゃい。そんなもんじゃないはずよ」

今度は何を仕掛けてくるのかと思ったらなんと分身して2人になりやがった。ひきょーだぞオイ。

それで2人の幽香が俺に傘を向けマスパを撃って来た。

「なっ！？よけれねーぞ、こんなんよ！」

そのまま俺はマスパの光の中に埋もれていった。

第十八幽　それ逝け三月妖？～What kind of blood is

はい、読了感謝です。霊香さんの次はカナって言ってましたが先にこの良くわからないものが入ってしまいました。
このどうしようもない幽月誘拐事件ラストですがもう一つこれと１８０。違う物もうかんでましたが推敲した結果こちらになりました。
没はギャグ重視でしたお！

えっと２０００ユニーク記念になんかしますが一つはまだ未定です。なんでも結構ですお。番外編なり、クロスなり、ゆうげっさんの過去的な何かなり、幻想郷の住民で学校生活的なものでもいいです！
ただし１８禁はむりぽですｗ

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

・・・・・えと、没連載の名前は「東方安部漢」でした。間違いなくノクターンですね。ウホッいい男達２が欲しい。どこにもうってなかった（泣）

では今度こそばいばばーい☆

第十九月　それ逝け三月妖？～W幽さん達の場合（前書き）

どうも糖類です。
今回はまた締まりの無い戦闘回です。

とくにないのでw
それでは第十九月です。銅像。

第十九月　それ逝け三月妖？～W幽さん達の場合

【第伍ノ巻　狂戦】

「殺ったのかしら？」

モクモクとマスタースパークの所為で煙があがっているところを見つめる少女、風見幽香が呟いた。言葉では勝敗が付いたかのように言うが依然として鋭い目つきで警戒しているのは大妖怪の経験の証といえようか。

「げほっげほっ・・・・・ククク、残念ながら生きてるぜ？」

煙から一つの人影が。人影が幽月と化していった。身体のあちらこちらから血を流しながらも平然と歩き、幽香を見据えどこからか取り出した煙管を吸う。

「あら、やっぱり一筋縄じゃ倒せないじゃない♪」

「俺はもう痛さで気絶しそうだし、血流しすぎたせいで死にそうなんだがな」

「嘘をおっしゃい。本当にそうだとしたら普通、暢気に煙管なんて吸えないわよ」

「俺に普通を求めるな」

ドヤ顔で迷言を放つ幽月。もはやこれがお決まりのフレーズなのかもしれない。

迷言を放った後、カチャッと音を立てながら短刀と脇差を抜き、右に短刀、左に脇差を持って適当に構えをとる。

「本当は二刀流でやりたかったんだが番傘も刀も置いてきちまったしなぁ」

二刀流は本来、太刀と脇差で行うものだがあいにく持ち合わせてなかったので代理のものにした。

「二刀流でも最後は格闘になりそうなんだけど。あなたの場合は」

「そりゃあ・・・・直で血を浴びた方が楽しいじゃねーか。ヘマトフィリアなのかもな、俺ぁ」

「自分を異常性癖者と言うのをやめなさい」

実際のところ彼は血に興奮するヘマトフィリア（ボレアフィリア）ではなく、食うか食われるかの殺戮愛好や罪を犯すことで満足する罪科愛好（ペックアティフィリア）、食人症（カニバリズム）、吸血症（ヴァンパリズム）といったものだろう。

「無自覚より自覚してる方がましだろ？」

「そういう問題では無いと思う・・・・っわ！」

幽香は答えると同時に日傘を幽月に振り落とす。がそれを幽月が短刀の腹で抑え、脇差で反撃する。

「おいおい不意打ちってくるたぁ随分と酷でぇじゃねか」

「フフフ、私は鬼とは違って正々堂々と殺人しないの。私はね・・・・美しく勝てばいいのよっ！」

再度日傘を幽月に振り下ろす。それを幽月が、避けない。そのまま日傘は綺麗な弧を描き彼の右肩に直撃し、彼の肩が軋む。これには幽香も想定外だったらしく唖然として動きを止めてしまった。

「きししし・・・・・・・・・かはは、あはははは、アハはハハはハはハハは、ギャハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！・・・・そうだな、そうだぜ、そうだよな！殺しにゃ掟も制限もなにもありゃしねぇ。どんなうす汚ねぇ手を使ってでも相手をぶっ殺す。それが華。最高の華だ！そこにルールだの正々堂々だの甘ったれた物を持ってくるほうが悪いんだ。殴って蹴って斬って撃って打って潰して刺して、殺して殺しまくる。それが殺し合い、殺し愛ってもんだぁ！」

そんな狂気の叫びを上げた後に幽月は日傘を掴み、力任せにへし折った。そしてそのまま脇差を無茶苦茶に振り回す。避けようともあまりの速さとかなりの回数の振りにより間に合わないので仕方なく、

さっきまでの美しさを失い禍々しい雰囲気を代わりにはなつ傘で受ける幽香。

「クッ何よ。まるで本当に頭の天辺から脚の爪先まで狂ってるみたいじゃないの！」

「ギャヒヒヒヒヒヒ、そうだ俺は狂ってる。狂って何が悪いんだぁ、あああぁ！？」

振り回すのを止め、今度は零距離まで近付いてそこで獲物を仕留める攻撃に変える。それをギリギリで避ける幽香。先ほどとは一変して形勢が真っ逆さまと化した。

「な！？・・・・ふふ、いいわ。私も本気でいくわ。うっかり殺しちゃうかも知れないけどね」

彼女はできる限り距離をとると自分の妖力を手へ、拳へと移す。いつもなら数秒でできるが、疲労や焦りなどもありすこし時間が掛かった。

「受けきってみなさいな、私の全力をねえ！」

最大まで、自身の身体が耐え切れる最大までの妖力を出し、拳を振るう。

「ギャハハハ、ハハハ。俺は・・・・・俺ぁ・・・・・・俺は俺だあああああああああああ！」

半狂乱、なんて言葉じゃ利かないぐらいの狂乱。そう狂い乱れて幽香を仕留めようと近付き、脇差を振るう。

そして拳と刃が重なる・・・・・・はずが、

「あんた達ねぇ、一回頭を冷やしなさい。夢想封印！」

霊香の制裁により重なる合うことなく二人は夢想封印の光の中へと消えていった。

「「アッーーーーーーー♂」」

爆音（ピチューン）

＞幽月視線＜

よぉ、みんな大好き素敵な汚兄さんのゆうげっさんだ。

現在、霊香曰く、「この件は私で判断できないわ。しょうがないから幻想郷の重鎮を2人呼ぶから夜露死苦」だそうで、博麗神社の霊香がいつも仕事をサボる部屋・・・まあ居間だな。そこで絶賛正座中だ。隣には幽香や元の大きさに戻った幻月、夢月も正座している。その後ろには心配そうな顔をしている夢幻館組と空。それと・・・・・・ニヤニヤ笑っているカナ。あとで泣かしてやる。無事だったらだがな。

「おい霊香、いつまでこうさせてるつもりだよ？もう足が危険信号を点滅させてるんだが」

ほかの正座組も「そうだ！ロリコン巫女！」　だとか「恥を知れ俗物」・・・ハマーン・カーンだったり「はやく開放しないと神社潰すわよ」　と罵声を浴びせる。

「うるさい黙れミンチにすんぞ。もうちょっと辛抱しなさいよ。たぶんそろそろ幻想郷のツートップが来るから・・・・って来たわね」

霊香の視線を辿るとちゃぶ台の誰も座って無い場所の空間に２つの切れ目が現れ、それぞれ一人づつ人が出て来た。

・・・さて、どんなお叱りを受けるのかねぃ。かはは。

「なぁ慧音、私達って居た意味あるの？」

「無いな」

第十九月　それ逝け三月妖？～W幽さん達の場合（後書き）

はい、読了感謝です。ｉｐｏｄで書いてるので長い文が書けないｗ慣れてないだけですけど。幽月視線のところからｉｐｏｄで書きました。
変なところあったらなんなりと

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1005x/

東方妖快園

2011年11月25日00時00分発行